

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Diversification of Mwaneaba : The Local Meeting Houses in Tabiteuea South, Kiribati

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 風間, 計博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004106

タビテウエア・サウスにおけるマネアバ （集会所）の多様化

——外部論理の遮断・変換・摂取——

風 間 計 博*

Diversification of *Mwaneaba*: The Local Meeting Houses in Tabiteuea South, Kiribati

Kazuhiro Kazama

本論文では、中部太平洋のキリバス南部に位置する、タビテウエア・サウスにおけるマネアバ（集会所）の現状を実地調査の資料に基づいて記述する。さらに、首都と離島部との政治経済的なつながりを、マネアバがいかに媒介するかを考察する。

現在のマネアバは、旧来の民族誌における記述とはまったく異なり、各行政村のほか、キリスト教会、島行政府や学校に付随して多様化している。各マネアバでは、対応する社会集団に関わる合議や饗宴が長老を中心に開催され、その成員を統合している。一方、タビテウエア・サウスは首都を通じて外部世界と接続している。首都から来た中央の政策や諸制度は、まず各種マネアバにおける合議により検討される。マネアバは外部の論理を一時的に遮断し、在地の論理を付加して変換する装置として作動している。

This paper discusses the politico-economic relationship between central institutions in the capital and the local society of Tabiteuea South in Kiribati in the Central Pacific through the medium of meeting houses, called *mwaneaba*. It is based on the author's field research conducted there from 1994 to 1996.

Grimble and Maude, who were colonial administrators and anthropologists, reconstituted what was considered to be the traditional

* 国立民族学博物館講師（COE 研究員）

Key Words : *mwaneaba* (meeting house), local idea of equality, elder council, *botaki* feast, Tabiteuea South

キーワード：マネアバ（集会所）、在地平等理念、長老会議、ポータキ（饗宴）、タビテウエア・サウス

mwaneaba in the early twentieth century. The *mwaneaba* system has been historically diversified and their description cannot be applied to present circumstances. I observed several types of *mwaneaba* in Tabiteuea South. Each is accompanied by a particular social group, such as the administrative village, a church organization, the Island Council or a public primary school. Various meetings and feasts are held in *mwaneaba*, consolidating the members of each social group.

All meetings at *mwaneaba* are controlled by elders. The *mwaneaba* effectively blocks the authority of the central government. All economic opportunities offered by external agencies are accepted and discussed by the *mwaneaba* meetings, and distributed among people according to the local morality of equality. The *mwaneaba* functions as an apparatus to transform the logic of the outside world.

はじめに	4-2. 学校マネアバ
1. 調査地を取り囲む状況	4-3. 教会マネアバ
1-1. タビテウエア・サウス	5. カトリック・マネアバの新築
1-2. キリバスの政治・経済的特徴	5-1. 石柱の切り出しおよび運搬
2. マネアバ研究の現状	5-2. 村の3グループによる資材調達
2-1. 「伝統的」マネアバの研究	5-3. 資材購入用の資金調達
2-2. 従来のマネアバ研究の問題点	5-4. 取り壊しおよび建設作業
3. 村マネアバとイナキの現状	6. 考察——「在地論理」の場としてのマ ネアバ——
3-1. 職能をもつイナキ	6-1. 「伝統」とキリバスのカテイ
3-2. イナキに関する知識の混乱	6-2. マネアバと平等理念の結合
3-3. 現在のイナキの意味	6-3. マネアバによる社会集団の統合
3-4. 行政末端としての村マネアバ	6-4. 「変換装置」としてのマネアバ
4. 「新しい」マネアバ	おわりに
4-1. カウンシラ・マネアバ	

はじめに

オセアニア島嶼地域にはさまざまな集会所があり、各種の儀礼を行う場として、あるいは共同体の政治の拠点として、人類学的研究の主題に採り上げられてきた (e.g. アレン 1978; 青柳 1982; 松岡 1927: 511-535)。本論文の対象である中部太平洋のキリバス (Kiribati)¹⁾ においても、「社会生活の中心」としばしば表現される集会所マ

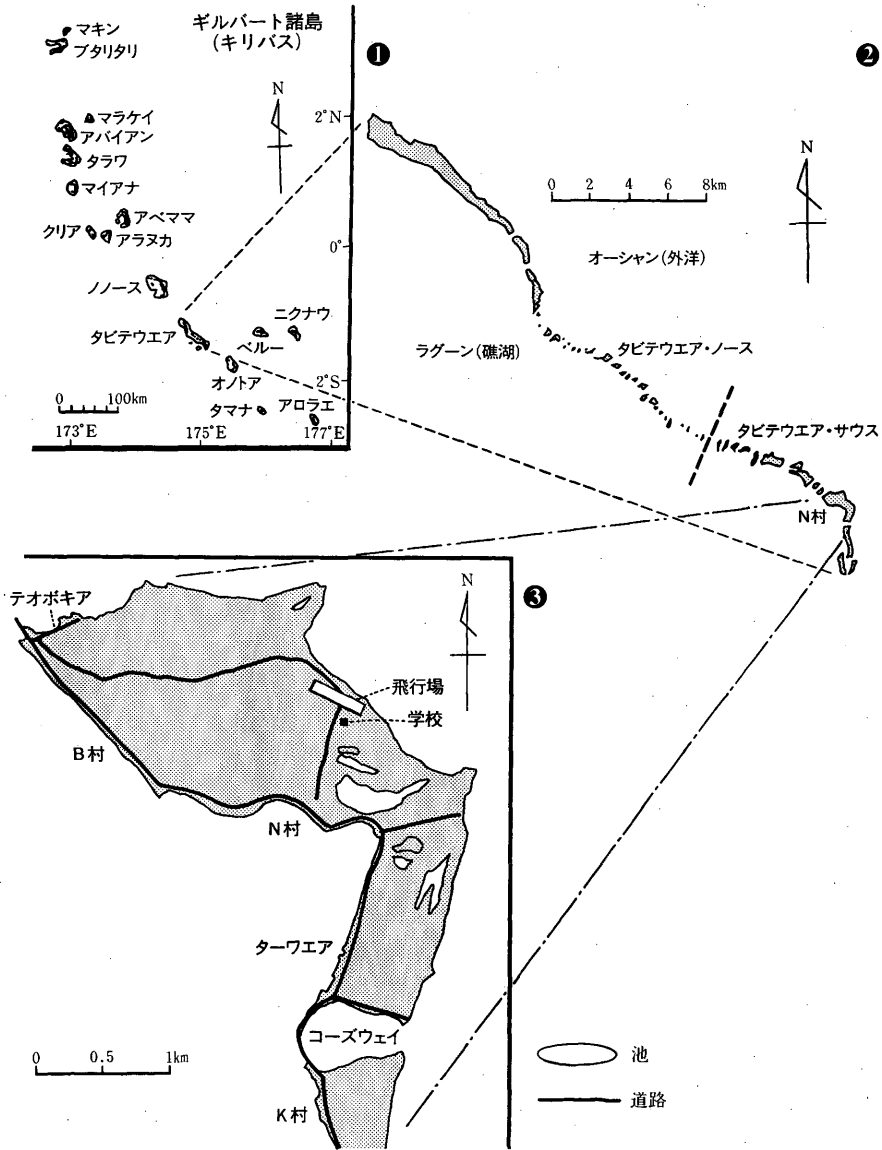
ネアバ (*mwaneaba*) が発達し、植民地行政官であった人類学者の興味を強くひいた (Maude 1977 [1963]; 1980 [1961]; Grimble 1989)。ただし、サルベージ人類学的な当時の潮流のなかにあつて、キリバスの先駆的民族誌家によるマネアバ研究に、同時代的視点が欠落していたのは、当然といえるだろう。彼らは、すでに調査時には失われていた過去の再構成を目標としていたのである。

先駆的民族誌家による資料収集が行われてから一世紀近く経って、キリバスの人々は過去のマネアバに関する知識や神話をほとんど忘却している。それにもかかわらず、マネアバは機能を变えて存続し、多様化し、増加して現在に至っている。このような状況にあつて当然のことながら、再構成された過去の民族誌の情報は、現在のマネアバを分析するにあつて、有効な枠組みを与えてはくれない。本論文では、キリバスの南部離島、タビテウエア・サウス (Tabiteuea South) における実地調査で得た資料に基づき、多様化したマネアバを論じる。調査は主にタビテウエア・サウス中部の N 村において行った²⁾。

論文の目的は第一に、ほとんど紹介されることのなかった現在のマネアバの状況を民族誌的に示すことである。まず、N 村マネアバの現状を詳細に記述し、過去の民族誌で描かれた「伝統的」マネアバとの差異を明らかにする。次に、これまで研究対象とされてこなかった多様な「新しい」マネアバの実態を記述する。各種マネアバは、村人が社会生活を営む上で必然的に関与せざるを得ないものである。さらに、私が N 村に滞在していた期間中に行われたカトリック教会のマネアバ新築作業の過程を採り上げる。マネアバ新築に関する協同作業は、村人たちの社会生活の凝縮といえる事例である。

第二に、現在のマネアバを、首都南タラワの政治経済システムとの関係に焦点を当てて考察する。タビテウエア・サウスは、キリバスのなかでも首都からの交通が不便な、いわば辺境の地といえる。しかしながら、歴史的に世界システムに包摂され、そこに住む人々が外部のシステムに否応なく翻弄されてきたのは明らかである。キリバスという国家に組み込まれている現在、タビテウエア・サウスのマネアバは当然、国家とそれを取り囲む政治経済状況から独立しているわけではない。現在のマネアバを論じるためには、とくに首都から来る外来の諸制度を必然的に視野に入れなければならない。

タビテウエア・サウスというマイクロな調査地は国家を經由し、マクロな世界大の政治経済システムと接続している。住民にとって主要な換金作物であるコプラは、タビテウエア・サウスから海外へ輸出され、人々の主食はオーストラリアから輸入した



地図 調査地の位置および概略

- ① ギルバート諸島 (キリバス)
出所：H. Van Trease (ed.) *Atoll politics: the Republic of Kiribati*. より改変
- ② タビテウエア環礁
出所：Land and Survey Division, Government of Kiribati. より修正
- ③ タビテウエア・サウス拡大図
出所：Land and Survey Division, Government of Kiribati. より修正

風間 タビテウエア・サウスにおけるマネアバ（集会所）の多様化

米・小麦粉である。現在の主要な出稼ぎ先は外国船であり、賃労働の報酬として人々に配分される国家歳入の多くは、海外から得た援助資金である。本論文においては、調査地におけるマネアバに関わる現象を、マクロな政治経済システムとの接続を念頭におきながら、首都や国家との関連において考察する。

1. 調査地を取り囲む状況

1-1. タビテウエア・サウス

タビテウエア環礁は、南北2つの行政地区に分かれている。環礁の北部と中部がタビテウエア・ノース行政区となり、南部がタビテウエア・サウス行政区となっている。

人口および宗教

タビテウエア・サウスは6村からなる。これらの村は主に、各小珊瑚島（アイレット）ごとに形成された自然村であり³⁾、同時に最小の行政単位となっている。1995年の人口調査によると、キリバス共和国の居住者のなかで、故郷がタビテウエア・サウスと回答した人は2,322人いた。外国を除いて、タビテウエア・サウスを故郷と見なす行政区外居住者は1,133人おり、その割合は49%にのぼる（Statistics Office 1997: 69）。タビテウエア・サウス全体では275世帯、1,404人が居住しており、人口密度は118人/km²である（Statistics Office 1997: 1）。この1,404人のうち、当該行政区を故郷と見なす者は1,189人（85%）いる。残る行政区内人口の15%は他島出身者であり、土堤道路工事関係者や公務員などの定職者、および婚入女性である。調査地のN村の人口は約180人であった。

信仰する宗教別にみると、275世帯のうち136世帯（49.5%）がカトリック、96世帯（34.9%）がキリバス・プロテスタント教会（KPC; Kiribati Protestant Church）、37世帯（13.5%）がバハイ、6世帯（2.2%）がその他の宗派となっている（Statistics Office 1997: 117）⁴⁾。なおN村は、村はずれにある学校教員住宅の一部世帯を除き、カトリック信徒のみだった。ここでいう世帯とは、後述する小家族世帯ムウェンガ（*mwenga*）である。ただし、老人や子供は頻繁に移動するので、必ずしも世帯の成員が固定しているわけではない。また若者が首都へ出かけると、数ヶ月から数年もの間、村に帰ってこないこともある。

行政機関

N村の北に位置するB村の北西端にテオボキア (Teobokia) とよばれる地域があり、タビテウエア・サウスの行政的な中心となっている。テオボキアには島行政府 (Island Council) の事務所、ゲストハウス、生協店舗、コブラの倉庫、診療所、農業省の出張所、島行政府の集会所 (カウンシラ・マネアバ [mwaneaba n te kauntira]) などがある。行政府事務所の建物には、土地法廷事務所、警察署、郵便兼無線局が付随している。テオボキアには公務員住宅もあり、そこで働く者とその家族が住んでいる。またタビテウエア・サウスの6村からは、それぞれカウンシラ (kauntira) とよばれる行政官が村ごとの選挙で選出され、うち1人がカウンシラ長となる。各村のカウンシラは、島における中央政府の代理人であるクラーク (kiraka) や公務員と村住民を結ぶ役目を担っている。さらに、6村の長老男性ウニマーネ (unimwane)⁵⁾の意見をとりまとめる長老会議が組織されている。カウンシラ・マネアバにおける公聴会や合議において、長老たちはクラークや公務員に対して要望を出し、政策への質問をする。クラークは中央政府と島との間に、カウンシラは島行政府と村との間に挟まれ、両者の情報を伝達し、折衝するに過ぎない。むしろ、中央政府の公的なエージェントではない長老会議が、タビテウエア・サウスにおいて強力な決定権をもっている。

学校

戦前の行政府は植民地経営に最小のコストしかかけなかった。そのため、公的な学校教育を行ったのは、キリバス人官吏養成を目的とした首都タラワの公立学校のみに限定され、それ以外は専らキリスト教会に教育を委ねていた。第二次大戦後、離島部でも公立の初等学校が作られ始めた。タビテウエア・サウスにおける初等教育も長期にわたり、キリスト教会の下にあった。現在でもB村カトリック教会マネアバの裏には、教会が運営していた学校の校舎が残っている。教会による初歩的な教育が浸透していたため、現在60~70歳の長老さえも、ほとんどキリバス語の読み書きができ、識字率は100%に近いと考えられる。タビテウエア・サウスでは、1980年代末になって公立の初等学校が作られた。現在、飛行場のN村寄りに島最大の初等学校があるほか、初等学校はタビテウエア・サウス全体で計4校ある。近年になって各村のマネアバを使った幼児教育も行われ始めた。

交通・流通および消費

タビテウエア・サウスの住民を外部とつなぐ交通機関は、飛行機と船である。1981

年に N 村と B 村の外洋に面した境界に飛行場が作られ、スケジュール上は週 1 回、タラワからの飛行機便が運行している。ただし実際には、飛行機の故障や燃料不足が頻発するため、2 週間から 1 ヶ月間以上欠航することもしばしばある。またタラワへの航空運賃は片道約 100 豪ドルかかり、定職をもたない一般の住民にとってかなり高額なため、主に公務員や出稼ぎ者が利用する。

一般の人々がタラワへ行く場合、通常は船を利用する。物資の移入に関しても、飛行機より船便が重要である。行政の中心であるテオボキアが、船で運ばれてきた積荷の陸揚げ地になっている。船からは主食の米、小麦粉、砂糖などの食料や生活必需品を降ろし、島からは唯一の換金生産物であるコブラを積み込む。船で移入する物資は、住民の生活にとってきわめて重要な役割を担っており、ラジオで聴いた船の情報が人々の日常的話題にのぼっている。船便は不定期な上、仮に来たとしても貨物が積まれておらず、コブラを積み込むだけのこともある。独立直前の 1976-77 年の運行表と比べても、現在の船便数は少なく、輸送の状況はむしろ悪化している（風間 n.d.）。

タビテウエア・サウスでは、外国船出稼ぎ者や公務員を除いた人々にとって、コブラ生産が現金を得る主要な方法である。他に、船荷の積み降ろし、不定期的な建設労働の雇用が村人の収入源となる。世帯規模で魚やタバコなどを売り、僅かな収入を得ることもある。これらの収入は、主に輸入食料品や嗜好品、生活必需品を商店で購入することによって消費される（風間 1997）。

商店は 1994 年時点で、テオボキアの生協のほか、プロテスタント信徒共同経営、個人経営など計 5 店舗あった。ところが、実際の物資入荷はきわめて不安定であり、船到着から 1 週間後には店から商品がなくなり、次の船まで開店休業になることがしばしばあった。物資欠乏時に貨物が入荷すると、人々はパニックのように店に殺到し、商品を巡って暴力事件まで起こった。さらに 1995 年の初頭には、最大の物資供給源だった生協卸売会社が倒産して、タビテウエア・サウスでは極度に物資が欠乏し、私自身も厳しい飢えを体験した。そのとき人々は、ココヤシの果肉を嚙りながら飲料で腹を膨らませて、次の船便による貨物入荷を待つしかなかった。生業的な食料生産は、厳しい自然環境および歴史的な衰退によりきわめて脆弱であり、人々は輸入物資に主食を依存せざるを得ない状況にある。しかも、主食を含む物資の移入がしばしば途絶える（風間 1997）。この二重の構造的な要因による慢性的な物資欠乏状態を、私は「二重の窮乏」とよんでいる。

1-2. キリバスの政治・経済的特徴

以上のように、タビテウエア・サウスは首都から遠隔の地にある。しかしながら、外部世界から隔絶しているわけではない。人々はコプラの移出、賃労働や出稼ぎなど、首都を通じて現金を得て、さらに主食や生活必需品を首都を経由した移入に依存している。また、行政や教育、宗教などの諸制度は、首都とのつながりによって成り立っている。

このようにタビテウエア・サウスを条件づけている、首都およびキリバス国家の政治経済的状况を概観する必要がある。そのためにはまず、オセアニア島嶼の「MIRAB 経済」論を参照しなければならない。オセアニア島嶼国は国土の分散性、資源の貧困性、人口の小規模性などの特徴をもち、国際的資本にとって経済的な魅力に乏しい。MIRAB 経済とは、オセアニア島嶼国の経済的特徴を説明するために提出された概念である (Bertram & Watters 1985; 1986)。多くのオセアニア島嶼国の経済は、海外への出稼ぎ移民 (M: migration), その移民から故郷への送金 (R: remittances), 旧宗主国など外国からの経済援助 (A: aid), それらの国家歳入を国民に配分する機能を果たす、人口に比して大きな官僚機構 (B: bureaucracy) に特徴付けられる。つまり MIRAB 諸国は天然資源が貧弱で人口規模が小さく、第一次生産物を輸出して外貨を獲得したり、低賃金の労働力を求める海外からの資本が投入される機会がほとんどない。別言すれば、世界システム中核国の資本による搾取構造に充分には組み込まれていない。国家の経済はむしろ、中核国からの援助という、搾取とは逆の資金の流れに依存する。島嶼国の住民もまた、積極的に資本の集中する海外の都市へ出かけていき、搾取構造に参入することを自ら選択する。

バートラムらは独立以前のキリバスを MIRAB 経済のひとつに位置付けている。しかし、現在のキリバスでは、出稼ぎ移民の機会が少なく、MIRAB 経済の典型からはずれている。これは、主要な出稼ぎ先であったナウルにおいて、近年、燐鉱石がほぼ枯渇したことに対応している。現在では、外国船の乗組員として雇用されることが、ほぼ唯一の出稼ぎ機会となっている。私は、このようなキリバスの経済的特徴を「FFAB 経済」と名付けた (風間 1999c; n.d.)。キリバスの経済は、自国領海内の外国船操業と引き替えに得る入漁料 (F: fish royalty), 歳入均衡化準備基金 RERF の運用益 (F: fund) ⁹⁾, 援助 (A) と官僚制 (B) に特徴付けられる。つまり FFAB 経済は MIRAB 経済の亜類型である。一方、タビテウエア・サウスから見た場合、キリバス国家の FFA に基づいた歳入は、首都在住の親族から時折ある仕送り、島行政

府による少人数の職員雇用、不定期の建設賃労働の雇用として流入してくる。海外からもたらされた資金は、細いチャンネルを通過してタビテウエア・サウスに到達するのである。この配分は、FFAB 経済の B（官僚制）が主に関係する。

以上のように、海外からの資金や物資、政策や諸制度は首都を経由してタビテウエア・サウスにやってくる。そのとき、タビテウエア・サウス側の受け手として各種のマネアバが重要な役割を果たす。以下の章では、これらマネアバを対象に記述を進める。

2. マネアバ研究の現状

2-1. 「伝統的」マネアバの研究

マネアバは通常、入母屋形式の屋根をもつ大型の建築物である⁷⁾。壁はなく、床には珊瑚屑の白い小石が敷き詰められていることが多い。首都南タラワの道路を乗り合いバスで走ると、道路脇に大小さまざまな幾つものマネアバが建っているのを見ることができる。首都南タラワ、エイタ地区のマネアバのように、珊瑚岩の石柱、パンダナス葺き屋根、白い小石の床からなる建築物もあるし、教会に付随しているトタン屋根、コンクリート柱、コンクリート床の建築物もある。南タラワで最もよく目に付くのは、パンダナス葺き屋根でコンクリート床からなる、教会下部組織の小型マネアバである。土曜日の夜に明かりを灯し、一晩中ビデオ映画を上演している光景は、このマネアバで見ることができる。

植民地統治下に初代首相に選出されたナボウア・T・ランエタは、「我々の文化と伝統の心臓」とマネアバを表現した (Lundsgaarde 1978: 67)。独立後の官僚であるナキバエ・タボカイも同様に、マネアバを社会生活の中心と位置付ける (Nakibae Tabokai 1993: 23)。このようなキリバス人政治家や官僚の決まり文句には、島嶼国家が国家として成り立つための不可欠の条件である統一への、特別な強調を容易に読みとることができる。現在国家として統一されている島々は、以前は政治的に統一されておらず、それは外在的に英国統治によってもたらされた。1979年に独立を達成した同国は、この統一を植民地統治から受け継いだに過ぎない。このような状況においてマネアバは、島々の経てきた歴史的差異や多様性を排した、同質的な「キリバス社会」のシンボルとして用いられている。シンボル化されたマネアバとは、「伝統的」であると同時に、現代でも生き続ける存在である。ナキバエ・タボカイは「伝統的」



写真1 ニクナウ (Nikunau) 島, T村の村マネアバ

村人は、これがキリバスで最初のマネアバであると主張する。このマネアバの名称, イシニカラワ (Itinikarawa) とは「空の光」の意で, 太古の昔, 空と陸が分離したという神話に因む。
(撮影: 風間計博, 1996年1月19日)

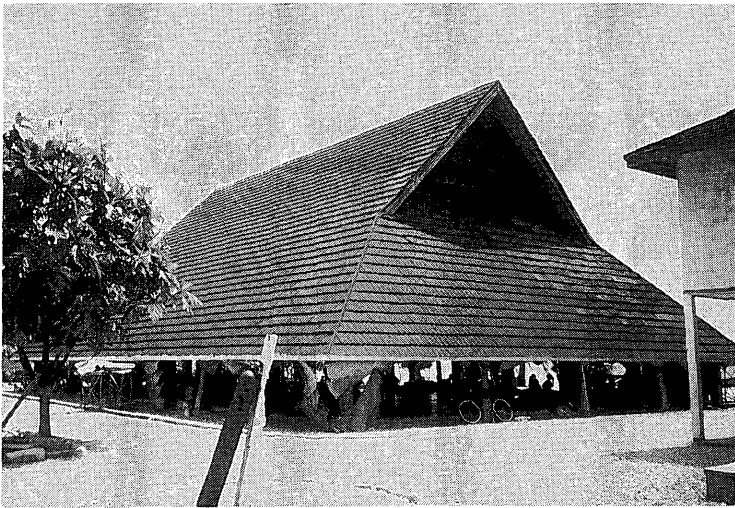


写真2 ニクナウ島, M村のプロテスタント教会マネアバ

スレート様金属板の葺き屋根, コンクリート床のマネアバである。(撮影: 風間計博, 1996年1月15日)

マネアバと現代のマネアバを区分しない。そして、あたかも神話時代と歴史的過去さらに現代を連続させ、またときに混同してマネアバを論じている。

一方、欧米人研究者はマネアバが「社会生活の中心」であることを強調しながらも、むしろ神話的時代に連なる、ヨーロッパ接触以前の「伝統的」マネアバに限定して記述する傾向があった。そして、このキリバス研究の先駆者たちが遺した記述が、権威をもって現在のキリバス人、とくに政治家や官僚などのエリート層に読まれている。さらに、その影響は演説やラジオ放送を通して、離島部の人々にも及んでいると考えて差し支えない。現代のマネアバを記述し分析するにあたって、これら権威をもつ民族誌の内容に触れることは、そのような理由からも意義があると私は考える。

（マネアバは）共同体の社会生活全体の焦点であり、その中では戦争や平和、共同体の繁栄に関する数多くの議論がなされていた。そこは慣習的規範の違反者を裁いたり、長老が抗争について聴聞し調停する法廷であった。また、威厳ある共同体の踊りやレクリエーションの場であり、格式ある祭礼の中心であった。マネアバは長老のクラブハウス、よそ者の仮宿、逃亡者の避難所であった。その屋根の下での振る舞いはすべてが謹厳に、そして厳密に慣習に合致しなければならなかった。マネアバに礼を失さないように、忌まわしい罪人にならないようにしなければならなかった (Maude 1977 [1963]: 11)。

「伝統的」マネアバにはボス (*boti*) とよばれる定まった座席があった⁸⁾。ボスにはさまざまな権利と義務の職能が付随していた。またボスは座席のみならず、それを占める人々の集団を指示していた。グリンブルやモードはこれをクランと書いている。ボス集団は共通の神話的先祖まで父系的に出自を辿ることができ、カーインガ (*kaainga*) という居住地とともに住んでいた⁹⁾。カーインガはボス開祖の居住地であった。カーインガ内にはムウェンガ (*mwenga*) という核家族規模の小家族世帯が幾つもあり、それぞれの長 (*atu n te mwenga*) が日常生活をとりまとめていた。カーインガ内のあらゆる事柄はムウェンガ長たちの話し合いによって決められた。同じカーインガに住むムウェンガ長のなかで、ひとりの長老がカーインガ長 (*atu n te kaainga*) とよばれ、代表としてマネアバの集会において発言することができた。マネアバやボスには、その創設や系譜に関する多くの神話があり、その知識がきわめて重要であった (Maude 1977 [1963]; Grimble 1989)。またマネアバを建設する際には、建設技術のみならず、呪文 (*tabunea*) などに関する知識が必要とされた (Maude 1980 [1961])。このような姿で描かれたのが、「伝統的」マネアバである。

しかし、ヨーロッパ人との接触以降、キリスト教化、植民地支配を経てカーインガは崩壊し、マネアバに関する慣習は急激に変化し、失われていった。カーインガ崩壊以降、現在に至るまで居住単位はムウエンガという小家族世帯となっている (Geddes 1977; Macdonald 1982)。聖性をもつとされた「伝統的」マネアバは世紀の変り目にはすでに姿を消していた。1910年代に植民地行政官としてギルバート諸島に渡ったグリーンブルは、ヨーロッパ人の影響下で「原住民の慣習」が消えゆくなか、マネアバから聖性が失われていった、と書いている。マネアバは従来、騒音を嫌い、思春期前の子供が周囲の広場に足を踏み入れることさえできなかった。ところがグリーンブルが赴任した頃には娯楽のホールと化してしまい、人々はトランプやスキトルズ（ポーリングのような遊び）をするために集まり、子供たちが一日中マネアバの中を走り回るようになっていた (Grimble 1989: 198)。

このような歴史的な現実にもかかわらず、比較的最近になっても神話やボスに固執し、「伝統的」マネアバのみに言及した研究がなされてきたのは興味深い (Hockings 1989; Latouche 1984)。当然ながら、島や村によって神話的知識の伝承には多寡がある。ラトーシュが1970年代に調査したニクナウ (Nikunau) 島では、ボスや神話について詳細に知識を保持している人がいた。私がニクナウ島を訪問した1995年時点でも、タビテウエアとは比較にならないほど多くの人がボスや神話について語ってくれた¹⁰⁾。しかし、このようなニクナウ島でさえ、「伝統的」と見なされる村マネアバ (*mwaneaba n te kawa*) は、普段ほとんど利用されていない状況だった¹¹⁾。人々は村マネアバよりも新しく、ボスもないキリスト教会のマネアバ (*mwaneaba n te aro*) を日常的な集会の場として使用する。ところが、現代においてきわめて重要なキリスト教会マネアバを考察の対象としたり、村マネアバの現状について詳細に論じた研究は、まったく見あたらない。1980年代に書かれたラトーシュによるニクナウのマネアバおよび神話研究は、まさに「サルベージ的」であり、同時代的な社会の現状を顧みしていない (cf. 清水 1996)。

2-2. 従来のマネアバ研究の問題点

マネアバを論じた既存の研究を仔細に検討すれば、「伝統的」でない事柄について記述の対象からはずす明らかな傾向が指摘できる。ランズガードは例外的に、現代のマネアバについて比較的詳細に論じている。彼は村マネアバ以外にも、キリスト教宗派や政府出先機関などのマネアバがギルバート諸島の至るところで見られると記述し、1978年時点において、諸島全体で少なくとも300以上のマネアバがあると推定し

ている (Lundsgaarde 1978: 69)。しかし、ランズガードが中心に据えて論じるのは、法的な側面のみである。犯罪者を裁く司法権など幾つかの権限が、「伝統的」マネアバから法廷などの現代的制度に移譲されたものの、村マネアバは村における政治的中心として、政治的機能を保持していることを強調する。またランズガードは、植民地化以降、住民を把握するためにマネアバが採用され、植民地政府の統治組織に接合されたと主張する。モードやグリンブルが述べるように、ボスの系譜に関する詳細な知識はすでに「崩壊」してしまったが、マネアバの「伝統的」機能が現代まで連綿と失われずに生きてきたことを強調するのである (Lundsgaarde 1970: 247-249, 254-256)。

私はランズガードの研究を評価したいが、全面的に受け入れることはできない。第一に、「伝統的」要素をもち行政府の下部組織として機能する村マネアバ、および島マネアバ¹²⁾のみを視野に入れているため、教会マネアバなどについては存在を示唆するのみで、正面から取り上げていない。つまり現実にあるマネアバの一部しか議論の対象にしていない。

第二に、村マネアバや島マネアバが過去の「伝統」と連続しているという単純な前提が問題である。確かに多くの村マネアバでは、かなりの差異があるにせよ、ボスが人々によって認識されており、一見「伝統的」である。しかし、現在の村 (*kawa*) とはあくまでも行政単位であり、カーワという用語そのものの意味も変化している(注9参照)。また、ランズガードのいう島マネアバに相当するカウンシラ・マネアバは、現在の島行政府に付随するマネアバである。このように、歴史的に新しい行政府とマネアバ(教会マネアバを除く)は強固に結合しており、単純に植民地統治以前からの連続性を強調することは誤りである。連続的な要素の存在を認めるにしても、現代の時代状況に即して評価する必要がある。例えばギルバート諸島南端にあるタマナ島においては、1881年以降のある一時期、確かにマネアバは消失していた。伝承によると、今世紀の初頭になって植民地政府の主導により島のマネアバが再建されたという。村レベルのマネアバは1941年に建てられた (Lawrence 1983: 31)。島による歴史的差異はあるものの、タマナでは明らかにマネアバの不連続性がみられる。

第三に、ランズガード自身も意識しているように (Lundsgaarde 1970: 264)、法的側面のみを強調することによって、マネアバのもつ多様な文化・社会的現象を切り捨てている。換言すれば、欧米の法律に準じたマネアバの解釈には、在地の価値や論理が入る余地がない (e.g. Lundsgaarde 1968)。その結果、欧米の法律との一面的な類似性がきわだってしまっている。また、マネアバ内部で実際に行われている事柄がまっ

たく描かれていない。

現在、マネアバが消滅したり、機能不全に陥っているのかといえば、当然答えは否である。矛盾するようだが、最もマネアバの数が多いのは、生活スタイルの欧米化が進行し、都市化の進んだ南タラワであることは、特筆に値する。このように「伝統的」マネアバの衰退ではなく、むしろマネアバが興隆していることが、キリバス人政治家や官僚が「社会の中心」とマネアバを評する背景をなしている。

このように見てみると、これまでほとんど描かれてこなかった現代のマネアバの状況こそが、キリバス離島部の社会を理解するために不可欠であることがわかる。次章以下、タビテウエア・サウスのN村を中心にマネアバの現状を具体的に記述し、分析する。

3. 村マネアバとイナキの現状

既存のマネアバに関する研究は、ボスや神話的由来に関するものが主題となってきた。この章では、N村マネアバにおける座席イナキ (*inaki*) の現状について記述する。ここでの目的は、従来のマネアバ研究では回避されてきた、現在のイナキの状況を論ずることにある。N村のようにイナキや神話的知識が「失われた」現況を積極的にとりあげた研究はまったくないことを強調しておく。なお、タビテウエアではマネアバの座席をボスとはよばず、イナキという(注8参照)。以下、N村に関してはイナキ、他島に言及する場合はボスの用語を用いる。

3-1. 職能をもつイナキ

N村マネアバにおけるイナキには、特別な職能を有するものが5つある。ここではそれらイナキの職能について記述する。なお、イナキ名は最初の戸別訪問時のインタビューで得たものを記し、角括弧内に後から得たものを記す(後述)。

- 1) エタニモーネ (Etanimone) [カロンゴア (Karongoa)] : 第一のイナキ, モア・ニ・バイ (*moa ni bwai*) とよばれ, 村マネアバの饗宴ポータキ (*botaki*)¹³⁾ 時には, 最初に食料を供出する。40歳代のタカレブおよび20歳代の息子ポーバイが座る。
- 2) ブリブリ・テ・ララー (Buriburi te Rara) : 第二のイナキ, ウオウア・ニ・バイ (*uoua ni bwai*)。70歳代女性「カラエシウのイナキ」¹⁴⁾ とよばれ, その孫である20歳代の既婚男性ヨアキムが座るようになった。なお, ヨアキムの

父親（テカエワウア）は、カラエシウの夫である祖父（テアウオキ）のイナキを継承している。

- 3) テ・ブレニウイ (Te Bureniui) [テ・ウィウィ (Te Wiwi)] : 第三のイナキ, テヌーア・ニ・バイ (*tenua ni bwai*)。20歳代の既婚者テイテイが座る。
- 4) テ・ブエ (Te Bue) : マネアバで「働く者 (*tani mwakuri*)」であり, また「マネアバの足 (*wae n te mwaneaba*)」ともいわれる。ポータキのときマネアバ内を取り仕切ったり, マネアバの建設や修理に携わる。50歳代前半のアンテレア, その弟である40歳代のリーノが座る。
- 5) テ・カタンラケ (Te Katanrake) : 上に同じく「働く者」のイナキである。成員はタータ, カーモキ, ポーカイ, テバレレイ, ナカエウエキアなど数多い。

調査時, 1) から4) までのイナキには長老がいなかった。通常, 第一のイナキが, ポータキなどで最初の発言をするという話を聞いた。しかし実際のポータキでは, 長老のアントニオやテプアウア, タータが話し始め, 進行を主導する。この理由について1) のタカレブに尋ねたところ, タカレブはまだ長老ではないので, 役目を長老に委ねているとのことだった。2) と3) のイナキは, 20歳代の青年男性のみしか前列に座る資格を有する者がいない。3) のイナキには40歳代のテカイワがいるが, 未婚のため正式なイナキの代表とは見なされていない。会話のなかでは「テカイワのイナキ」という表現も使われるが, 実際には既婚のテイテイがマネアバの集會に参加する。2) は年輩女性カラエシウのイナキとよばれる。カラエシウの息子のうち N 村に住んでいるのはテカエワウアひとりである¹⁵⁾。テカエワウアは父のイナキ, カロンゴア・ラエレケ (Karongoa Raereke) を継承しているため, ブリブリ・テ・ララーは継承者がおらず空席になってしまう。そこでテカエワウアの息子, ヨアキムが継承することになった。しかしヨアキムはあまり乗り気ではなかった。「第三のイナキ」の仕事が負担だからという。それでも必要なときには, ヨアキムが第三のイナキの代表として義務を果たす。

過去の民族誌によれば, すべてのボス (あるいはイナキ) には何らかの職能が伴っていた (Grimble 1989)。役割が分担された個々のボス成員が, 各自の義務を果たして協調することにより, マネアバや共同体が運営されていたという。現在の N 村のイナキを見れば, わずか5つのイナキのみが職能をもち, 後述のように他のイナキは村における居住を示すだけに過ぎない。全イナキが職能をもたずとも, 村マネアバは存続し得るのである。ただし「第二のイナキ」の継承例から, 職能をもつイナキが空席になることは避けられている。

以下、これらのイナキが職能を発揮する機会の事例を見てみる。

村マネアバ葺き屋根の修理

1994年9月8日、マネアバ棟付近の葺き屋根修理が行われた。私と妻がN村に本格的に住み始めて2日目のことである。その時点では、私たちの家屋建設は着手されておらず、長老、長老より若年の既婚男性ロロボアカ (*rorobuaka*; 戦士の意)、およびその家族らと村マネアバで寝泊まりしていた。当分の期間、長老や私たちが寝泊まりするのに、雨漏りするのは具合が悪いので修理することにしたという。

昼頃、テ・カタンラケのボーカイとテ・ブエのアンテレアが指図し、テ・カタンラケの若者たち(テルオンナン、ルアシウ、カーモキの息子のアントニオとサレー)およびテルルが村マネアバの屋根に登って作業にあたった。マラケイ (*Marakei*) 島出身のテルルが入っていたのは、すでに亡くなっていた彼の義理の父(妻の母の父)がテ・カタンラケであり、テルルもテ・カタンラケに座るからであった。アンテレアの説明によれば、村マネアバの修理を担当するのはテ・カタンラケおよびテ・ブエの成員のみであり、彼らだけが屋根に登っても良いという。この日は、棟付近のパンダナス葺材ラウ (*rau*) を補強し、棟と等しい長さに編んだココヤシ葉の細長いマットで間隙を塞ぐ作業が行われた。

作業後(13:30頃)、村マネアバで簡単なポータキがあった。第一のイナキのタカレブが小麦粉に砂糖とココヤシ果肉を混ぜて固めた団子 (*manam ni burawa*) および紅茶、第二のイナキのテイテイがスワンプタロの団子 (*manam ni bwabwai*) および紅茶を供出し、作業にあたったテ・ブエとテ・カタンラケの成員に振る舞った。ちなみに、その他のポータキ参加者は食事を持参していた。

新しいココヤシ葉マット

1995年11月24日、村マネアバで行われるポータキに備えて、床に敷くココヤシ葉製マット (*inai*) が新調された。その日は朝から、各世帯で作った新しいマットが運ばれ、村マネアバのすぐ傍らに置かれた。しかし、特別なイナキで作った3枚のマットをマネアバに運んできてそれらを敷くまでは、中に運び込むことはなかった。

(11:30) テ・カタンラケのナカエウエキアおよびテバレレイが第一のイナキであるタカレブの住居へ赴き、食事を振る舞われた後、タカレブの供出した新しいマットを運んできてマネアバ内に敷く。

(12:00頃) テ・ブエのリーノ、テ・カタンラケのタータ、ナカエウエキアおよびカー

風間 タビテウエア・サウスにおけるマネアバ(集会所)の多様化

モキが、第二のイナキであるテイテイのところへ行く。

(13:00頃) ティテイの住居で食事の後、供出された新しいマットを自転車で運んで来る。

その後夕方になってから、タータ、ナカエウエキアがテカエワウアのところへ行く。テカエワウアの同居している息子、ヨアキムが第三のイナキ継承者とされるためである。特別なイナキで編まれた3枚のマットを敷いた後、マネアバの横に積んであったマットを中に運び入れた。

ポータキ時の食料供出、客の贈与物受け取り

1994年8月5日、私と妻の歓迎ポータキが村マネアバで行われた。供出単位である各夫婦単位ブキ・ニ・バイ (*buki ni bwai*) が用意した食事の皿をテ・カタンラケのボーカイが集めて回る。まず、マネアバ北側中央に座る第一のイナキのボーバイ (タカレブの息子) から受け取る。タカレブはカウンシラ・マネアバに泊まり込んでおり、不在だった。次に南側中央に座る第二のイナキのテイテイ、さらに残りはテイテイの横(西側)から時計回りに食事の皿を受け取り、マネアバ中央に並べていく。受け取る際には、供出したブキ・ニ・バイの男性の名前を呼び上げる。なおこのとき、ヨアキムはカトリック説教師を務めており、第三のイナキは空席だった。

食後、私が立ちあがってお礼を言い、ツイスト・タバコ1ブロックを渡す。それを受け取ったのもボーカイであった。ボーカイはテ・ブエのアンテレアにタバコを持っていく。ポータキが終わるまでの間にアンテレアがタバコをすべての人々に分配した。なお、初めて村を訪問した8月3日、村マネアバでタバコを贈呈した際には、テ・カタンラケのテバレレイが受け取った。つまり、贈与物を受け取るのはボーカイ個人の役割ではない。

貝笛

村マネアバで会議 (*bowi*) や報告会 (*kaongora*)、または作業があるとき、貝笛 (*bu*) を吹いて村人を集める。この役割を担当するのも、テ・カタンラケおよびテ・ブエ成員男性のみである。主に、テ・カタンラケのカーモキ、カーモキの息子のアントニオとサレー (いずれも未婚)、ナカエウエキア、そしてテ・ブエのアンテレアが貝笛を吹く役目にあっていた。

踊り

ポータキにおける踊り (*mwaie*) のうち、ルオイア (*ruoia*) やカメイ (*kamei*) とよばれるものは、一部のイナキに関係した配列をとる。男性がベー (*be*) という踊り用の細編みマットを腰に巻き、女性の毛髪で作ったベルトを締めた格好で踊る¹⁶⁾。踊る際、男性はカタカナのコの形に並ぶのであるが、そのとき中央には第一のイナキの男性が立ち、左右両脇を第二、第三のイナキの男性が立つ。村マネアバにおいて、ポータキでもないのに輿に乗ったときには、座席に敷いてある太編みのパンダナス・マット (*roba*) を男性が腰に巻き、腰布を毛髪ベルト代わりにしてこの踊りを踊る。その際、第一のイナキのタカレブが中央に立って音頭をとるが、他はイナキに無関係の配列で踊っていた。しかし、1995年10月26日にカウシラ・マネアバにおいて、タビテウエア・サウス6村の踊り大会が行われたときには、第一から三番目のイナキまでは、原則通りに並んで踊っていた。それ以外のイナキは、立つ位置に関してとくに考慮されていないようであった。

N村におけるこのような事例から、5つのイナキに関して一部の職能が機能していることがわかる。しかし、単に5つのイナキに関わるだけであり、すべてのイナキが何らかの義務と権利を有するという、過去の民族誌の記述とは異なった様相を呈している。現在のN村では、イナキの職能はきわめて簡素化した形態で保持されている。

3-2. イナキに関する知識の混乱

これまで特殊な職能を伴うイナキについてのみ記述してきた。これ以降、職能を伴わないN村マネアバのイナキを記述の対象に加え、現在のイナキのもつ意味を考察していく。

グリンブル、モード、ラトーシュはマネアバのボスについて、10から20あまりの座席の位置を明確に線を引いて図示している (Grimble 1989; Maude 1977 [1963]; 1980 [1961]; Latouche 1984)。この場合には、座席範囲が柱や葺き屋根の位置を目安にして、固定されていると考えられる。私がニクナウ島の2つの村で調査したときにも確かに、ラトーシュの民族誌と同様のボス名称と区画図を得ることができた。しかし、N村ではまったく状況が異なっていた。

1994年8月に初めてN村を訪問したとき、私たち夫婦を迎え入れてくれた長老たちにイナキがあるかどうか尋ねてみた。その答えは、バレキアータウ (*Barekiatau*) という名の付いたN村のマネアバには、皆が一致して確かにイナキがあると言って

表1 N村マネアバにおけるイナキ名

世帯番号	人名	イナキ名	現在の居住地名
1)	タカレブ	Etanimone (Karongoa)	Maeon te Mwaneaba
2)	テイオーキ	?	Maeon te Mwaneaba
3)	アンテレア	Te Bue	Maeon te Mwaneaba
4)	タータ	Te Katanrake	Auriaria
5)	ナカエウエキア	Te Katanrake	Maeon te Mwaneaba
6)	シエラ	?	Maeon te Mwaneaba
7)	ブイヨナ	Te Bakoa?	Auriaria
8)	カロトゥ (テリアラワ)	?	Auriaria
9)	タビアン	?	Auriaria
10a)	テカエワウア	Krongoa Raereke	Auriaria
10b)	ヨアキム	Buriburi te Rara	Auriaria
11)	ボーカイ	Te Katanrake	Tenkieura
12)	タワンガ	Birimo	Auriaria
13)	ネアウア	?	Te Maunga
14)	テガウン	?	Te Maunga
15)	リーノ	Te Bue	Te Maunga
16)	カーモキ	Te Katanrake	Te Maunga
17)	カイウエア	Te Mauri	Te Neiba
18)	テバレレイ	Te Katanrake	Te Neiba
19)	バレリアキ*	?	Te Neiba
20)	タウアニコナ	?	Tabon te Ba
21)	アントニオ	Tawaea	Tabon te Ba
22)	テイテイ	Te Bureniui (Te Wiwi)	Tabon te Ba
23)	キマエレ	Te Bakoa?	Tabon te Ba
24)	テブアウア	Te Mauri	Tabon te Ba
25)	バコア	?	Te Bananginang
26)	テルオンナン	Te Katanrake	Te Bananginang
27)	カマータイ* (テルル)	(Te Katanrake)	Te Bono
28)	トアリキ	Tawaea?	Te Bono
29)	テウトゥ	Te Katanrake	Te Bono
30)	トンガウア	?	(Tawaea?)
31)	ルアシウ	Te Katanrake	Tabon te Ba

- 1) イナキ名および地名の後ろに付けた?は、本人は知らなかったが、第三者が主張した名
- 2) *印は夫と死別した寡婦を示す。世帯27) のテルルはマラケイ島出身男性。
カマータイの娘の夫で、世帯唯一の既婚男性のため、妻の亡父のイナキに座る。
- 3) 世帯番号8) では、'95年にカロトゥが教員宿舎に移り、テリアラワが住むことになった。
- 4) 世帯番号10b) のヨアキムは、父テカエワウアのイナキでなく祖母カラエシウのイナキに座るよう、要請されていた。
- 5) 世帯番号31) は'95年に新居を建てて、世帯番号13) から出ていった。
- 6) 世帯番号7) 10a) 23) 28) の世帯主は、戸別訪問時にイナキ名はわからず、後に判明した。

表2 イナキと世帯の対応状況

イナキ名	対応する世帯番号	世帯の数
Etanimone (Karongoa)	1)	1
Buriburi te Rara	22)	1
Te Bureniui (Te Wiwi)	10b)	1
Te Bue	3), 15)	2
Te Katanrake	4), 5), 11), 16), 18), 26), 27), 29), 31)	9
Karongoa Raereke	10a)	1
Te Mauri	17), 24)	2
Te Bakoa	6), 7), 23)	3
Tawaea	21), 28)	2
Birimo	12)	1
Bare te Ngaina	N 村には不在	0
Te Maikuike	N 村には不在	0
?	9), 13)	2
?	8)	1
?	20), 25)	2
?	2), 14), 30)	3
		計 31

- 1) 世帯27) はマレケイ出身の男性が妻の亡父のイナキに座っている。
- 2) 世帯19) は寡婦と未婚女性のみであり、表には入れていない。
- 3) 世帯番号は表1に準ずる

いた。ただし、幾つあるのかとの質問には、誰も明確に答えず、ただ「たくさんある」(A bati te inaki iai) との回答しか得られなかった。村マネアバで行われるポータキの際には、人々は毎回同じ位置に座るため、人々が自分の座席位置を認識していることは明らかだった。

村の最長老のひとりであるキマエレによれば、タビテウエア・サウスのマネアバには2つの型があるとのことだった。タボイアキ型とタビアン型である。この2つはイナキの配置が異なり、第一のイナキの位置が、タボイアキ型は北側座席列中央、タビアン型は南側中央にあるという説明を私は受けた。建築の規格の違いにより、マネアバは細かく分類されるというが (Maude 1980 [1961]: 10-12; Hockings 1989: 203-207), 村の長老たちはその知識をまったくもっていなかった。

N 村のマネアバがタボイアキ型であることについては、キマエレを含む長老の誰

もの意見が一致した。ところがグリンブルの民族誌には、タビアン型については記述があるものの、タポイアキ型には触れられていない。1930年代にマネアバ大工であったモードの「保守的な」インフォーマントは、この2つの型について（侮蔑的に）「新しいもの」であるから知識をもっていないと語ったという。大工が伝統的なマネアバと認めるのは、タボンテビケ型とマウンガタブ型のみだったとモードは記している (Maude 1980 [1961]: 47)。

イナキについての詳細を知るために、村にある31の世帯を戸別訪問したとき¹⁷⁾、それぞれの世帯主にマネアバのイナキ名を尋ねてみた。当初、17人が7つのイナキ名を回答し、残り14人の世帯主が自分のイナキ名を知らなかった。その結果に、後から判明したイナキ名を加えてまとめたのが表1および表2である。前述のように、カラエシウが自分のイナキはブリブリ・テ・ララーという名であり、孫（息子の息子）のヨアキムがそこに座ることになったと語った。さらに、長老のアントニオはN村不在者のイナキとして、バレ・テ・ガイナ (Bare Te Ngaina)、テ・マイクイケ (Te Mai-kuike) があることをしばらく考えた末に思い出した (表2)。その後もイナキについて村人に重ねて質問し、結果的に村不在者のイナキ2つを含めて12のイナキ名を収集した。なお、自分のイナキ名を知らないのは、若年者に限ったことではない。テイオーキヤキマエレといった長老男性やバレイアキのような年輩女性も自分のイナキ名を知らなかった。またイナキ名が判明した23人のうち、9人までもが同一のイナキ、テ・カタンラケであることも注目に値する。

村マネアバにおける各世帯主の座席位置を示したのが図1である。これらの図表から、現在村に住む人々が14のイナキ（名称不明分を含む）に分かれて座ることがわかる。しかし、イナキに関する人々の話を聞くとしばしば混乱が見られた。以下に具体例を示す。

イナキ名と旧カーインガ地名の混同

1) キマエレとイナキの話をしていたとき、彼は私の収集したイナキ名が、実は全てイナキ名ではなく、旧カーインガの地名だと主張した¹⁸⁾。つまりキマエレは、旧カーインガの地名とそれに結合するイナキ名を混同して人々が用いているというのだった¹⁹⁾。ちなみにグリンブルやモードの座席配置図に現れるボス名称を参照すると、N村の人々のいうイナキ名に共通するのは、テ・マウリ (Te Mauri) とテ・カタンラケおよびビリモ (Birimo) しかなかった (Grimble 1989)。また、エタニモーネ、テ・ブエ、ターワエア (Tawaea)²⁰⁾ などの地名がN村内にあるのは事実である。

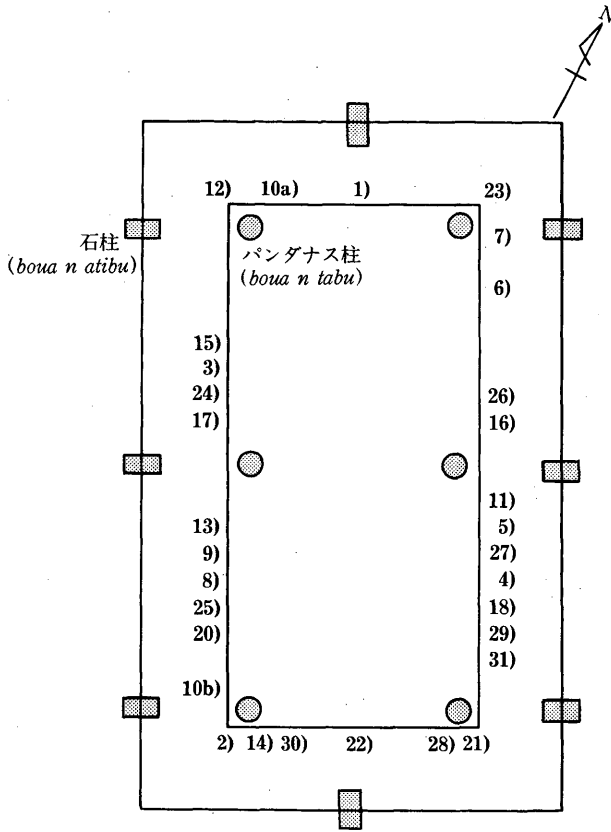


図1 N村マネアバにおけるイナキの配置
*図中番号は表1に準ずる

2) 未婚の中年男性テカイワは、彼のキョウダイであるテイテイのイナキ名はテ・ウィウィであり、旧カーインガ名がテイテイの主張するイナキ名テ・ブレニウイなのだと主張した。これは先のキマエレの主張、つまり旧カーインガ名とイナキ名の混同と重なるものである。さらにテカイワは彼の父およびキマエレのイナキ名はテ・バコア (Te Bakoa) であり、旧カーインガ名はテ・ネイバ (Te Neiba) だといっていた。このイナキ名を長老のキマエレは知らなかった。テ・ネイバは、集落内の地名として存在する。

土地保有とイナキの関連性

旧カーインガ地名とイナキ名が混同されていることから、旧カーインガの土地保有

表3 イナキに関わる旧カーインガの土地保有状況

世帯番号	イナキ名	推定旧カーインガの地名	旧カーインガ 土地保有
1)	Etanimone (Karongoa)	Etanimone	×
3)	Te Bue	Te Bue	○
4)	Te Katanrake	Te Katanrake	?
5)	Te Katanrake	Te Katanrake	○
7)	Te Bakoa	Te Neiba	×
11)	Te Katanrake	Te Katanrake	×
12)	Birimo	Birimo	△
15)	Te Bue	Te Bue	○
16)	Te Katanrake	Te Katanrake	×
18)	Te Katanrake	Te Katanrake	○
21)	Tawaea	Tawaea	×
22)	Te Bureniui (Te Wiwi)	Te Bureniui	○
23)	Te Bakoa	Te Neiba	○
26)	Te Katanrake	Te Katanrake	×
28)	Tawaea	Tawaea	×
29)	Te Katanrake	Te Katanrake	?
31)	Te Katanrake	Te Katanrake	×

- 1) ○：土地保有または土地相続権の保有，×：土地および相続権を保有せず
△：世帯主本人が知らない，？：不明
- 2) Tawaea とは、N 村南部全体を指示することが多いが、ここでは一筆の土地名に限定している。
- 3) 世帯番号は表1に準じる

とイナキに結合があることを予測して、何人かに質問してみた。調査対象者は、その人物がイナキ名として答えた名称が村内の地名と一致する者、および上記のテ・バコアに座席をもつ者の計17人である（表3）。アンテレアとリーノ兄弟がテブエに、テバレレイとナカエウェキア兄弟がテ・カタンラケに土地を保有したりその相続を主張していた。しかし、タカレブ、ポーカイ、カーモキらはイナキ名と一致する土地をもっていなかった。つまり現在、イナキの権利を保持するためには、イナキと結合していたという旧カーインガの土地保有は、必要条件ではないことが明らかになった。

イナキ名の混乱

1) 村の最年長男性テアウオキは、すでに公の社会活動から引退 (*mutirawa*) しており、稀にしかマネアバに姿を見せない。そのテアウオキによれば、彼のイナキはカロンゴア・ラエレケという名であり、旧カーインガ名はわからないとのことだった。また、テアウオキは40歳代男性のタカレブのイナキ名は、彼の主張するエタニモーネではなくカロンゴアであると主張した²¹⁾。なお、タカレブは私が村を離れる直前には、自分のイナキをカロンゴアであると主張するようになっていた。

2) タビアンは当初イナキ名を知らなかったが、ある日突然テ・マウリだと主張した。

3) ネアウアは私が尋ねた際、傍らにいた母親に聞いて自分のイナキ名を母方のイナキであるテ・カタンラケと答えていた。ただし、実際にはテ・カタンラケでなく父親から継承したイナキ (名称不明) に座っていた。彼はある日突然、自分のイナキをビリビリ・テ・ララー (*Biribiri te Rara*) であると私に主張した²²⁾。

2) のタビアンと3) のネアウアの主張を長老を含む何人かの村人に、確認のために聞いてみたのだが、誰もが明確に否定した。

複数のイナキの使用

あるとき長老のアントニオは、いつもと異なった場所に座っていた。多人数の来客があれば、客に押しやられて通常の座席と別の場所に座ることもあるが、そのときには村人のみしかいなかった。アントニオに理由を尋ねると、「ここも私のイナキなのだ」と笑いながら語った。アントニオは一時的にそこに座っただけで、後日、再び前の場所に座った。このように、ひとりの人物が複数の座席を使用することが可能である。これは、明らかに過去の民族誌の記述とは異なる事実であった。

イナキの範囲

N 村のイナキは物理的に範囲が固定した座席ではない。テカタンラケの成員は村在住の既婚男性30余名のうち 1/3 近くを占めている。ポータキ時にはすべての既婚男性が前列に座ることから、テ・カタンラケだけで大きく場所をとることになる。一方、ひとりだけあるいは空席のイナキもあることから、個々のイナキの座席範囲は人数によって大きく変わり得る。つまり、イナキは物理的に明確な境界線の引かれた座席というよりは、相互に位置関係が定まっている配置であり、個々のイナキがマネアバ内で具体的に占める空間は状況によって柔軟に拡大したり縮小し得る。多人数いるテ・

カタンラケから、他の潜在的権利を有するイナキへの移動は、現状では起こっていないし、その必要もないのである。

以上のように、ニクナウ島で私が得た資料やモード、グリンブルらの記述とは異なり、N村マネアバのイナキの明確な名称、関係する旧カーインガなどについて、村人の誰もが納得するような一致した意見はなかった。また神話やイナキの由来についての話もまったく聞くことがなかった。ニクナウ島やペルー島のような一部の例外を除いて、おそらくタビテウエアのみならず、たいていの島では同じ状況であると推測される²³⁾。

3-3. 現在のイナキの意味

私が聞いたイナキに関する情報は人により、また同人物であってもときにより、相互に整合性を欠いていた。このような情報をまとめると、以下のようになる。

1) 自己のイナキ名を知らない人が多いこと、イナキ名と旧カーインガ名の混同が見られることから、村人たちはイナキの名称を重要とは見なしていないことが窺える。イナキと旧カーインガの結びつき、神話的祖先に関する知識は継承されず、個人々人によって異なる断片的な知識を個別に保持している。それらの知識をマネアバの集会で相互に出し合い、コンセンサスに到達するまで議論し、公的な権威をその知識に付与することもない。

2) 村人が認めるイナキの総数は、名称不明および不在者分を含めて16ある（表2）。今後、認識されるイナキの数は減少していく可能性がある。タビテウエア・ノースやタラワ移住者のもとより、政府が移民を奨励するライン諸島への移住者は、帰ってくるか否か確かではない。不在者のイナキが忘却されるのは不可避である。

3) テ・カタンラケに多くの人が座り得ることは、物理的にイナキの座席範囲が固定化していない、つまり座席の間の境界線が明確に引かれていないことを示す。この事実も、過去の民族誌とは一致しない。仮に過去の民族誌のように、境界線が固定化されているならば、テ・カタンラケの座席は満員になり、母方のイナキに座る者が出てくるはずである。

4) イナキの座席位置は、主として父親から継承する。私の尋ね方によっては、漠然と先祖 (*bakatibu*) から伝わっているという。しかし、具体的な系譜を辿って先祖からの継承を詳細に説明することができる者はいない。

5) 1人の人物が柔軟に2つのイナキを行き来する例が見られた。周囲の人々もその行為に対してとくに気に留めなかった。つまり潜在的な権利を放棄せずに、複数の

イナキ座席を使用することが可能である。

6) テ・カタンラケを含めた複数の成員を有するイナキでは、イナキの長が定まっていな。さらにいえば、過去の民族誌にある、「ボス（イナキ）の長」という認識がないのである。民族誌によれば、ボスの長のみがマネアバで発言できたという。ところが現在、実際に発言するか否かは別にしても、マネアバ内の集会で既婚男性の誰もが発言可能である。

7) 日常生活のみならずマネアバでの集会においても、イナキ成員はひとつのまとまった社会集団を形成していない。既婚男性はイナキというよりも、世帯や夫婦の代表として参加する。つまり、村マネアバに入って座る権利としてのみ、イナキが認識されている。

以上指摘した通り、現在のN村マネアバのイナキが、民族誌に出てくるボス（イナキ）のモデルと異なることは明らかである。以下、現在のイナキのもつ意味を考察する。

たいていの村人はN村で生まれ、幼少時から村に住んでいるので、とくにイナキを意識する必要はない。子供の頃から躊躇なく村マネアバに入って遊び、やがて親からイナキを継承することができる。男性であれば、思春期までは父親の後ろに、結婚後は父親の座席の隣に座ればよい。女性であれば結婚前は父親の後ろ、村内の男性と結婚した場合は夫の後ろに座る。また、村外もしくは島外からの婚入女性も同様に夫の後ろに座る。N村に親族をもつ近隣の村人は、親族のイナキに座ることができる。通常はこのように、イナキや旧カーインガの名や系譜を知らなくても、マネアバを利用する上で混乱することはない。

イナキをもたない男性が村に居住している例もある。テルルはマラケイ島出身の男性で、N村の妻の家に居住している。当然彼はイナキをもたないが、村マネアバのポータキなどの機会には、世帯で唯一の既婚男性であるため前列に座らねばならない。テルルの座る場所は妻の亡父の位置であった。男女を問わず、一時的滞在であっても、婚入者がマネアバに入って座る権利は保証されている。もし、イナキをもたず、村に配偶者もないまったくのよそ者が来たならば、来客（*iruwa*）としてマネアバのラグリーン側の席²⁴）に座らされる。

さて、イナキの座席権に関する興味深い事例がある。N村には近年になって、新たにタビテウエア・ノースからやってきた世帯が2つあった。その世帯員はN村に血縁者がいた。その既婚男性であるブイヨナとトアリキは、マネアバでは血縁関係を迎える長老の傍らに座っていた。私が彼らにイナキ名を尋ねたところ、2人とも知ら

なかった。代わりに、自分のイナキは血縁関係のある長老（それぞれキマエレ、アントニオ）と同じイナキであると、2人とも答えた。現在彼らが座るイナキが、過去の民族誌に描かれた規則通りの父系的継承を経ている保証はまったくない。このように考えると単に村に居住することが、イナキをもつ必要十分条件となっているのである。村の居住は、ある人が少なくとも1人の村出身者に父系・母系いずれかの系譜を迎えることが可能であり、土地保有や相続を主張し得ることによって認められる。そしてまた、その妻（上述のマラケイ島出身男性のように、例外的には夫）も村に居住できるのである。

民族誌に登場する旧カーインガに結合したボス（イナキ）は、マネアバの座席であるとともに共住親族集団を表していたという²⁵⁾。ところが現在では、個々のイナキは社会集団を形成していない。確かに父子やキョウダイなど近い血縁者が同一のイナキに座る傾向がある。しかしイナキには、それをとりまとめるイナキ長もおらず、成員の居住地も世帯ごとに別々であり、村内の狭い区域に隣接して居住しているわけではない。日常生活において、イナキは同じだが居住世帯の異なる者どうしが、協同作業を行うとは限らない。むしろ、イナキや血縁に関わらず、近隣に住む者どうしや個人的に親しい者どうしが協同作業を行う。前述のようにせいぜい、職能をもつイナキの成員が個人や世帯単位でマネアバに関わる協同作業を時折行うに過ぎない。人々はイナキの代表としてマネアバに集まるのではなく、村の世帯または夫婦の代表として集会に参加するのである。その意味でイナキの権利とは、過去の民族誌に描かれるような親族集団に関わるものではなく、個人的な村の居住と結びついている。ランズガードは現在のボスについて以下のように書いている。

ボスの成員権（membership）には、複雑に絡み合った系譜によって準神話的な開祖との出自的絆を証明する、煩わしい論議はもはや必要ない。ボス成員との親族関係を示せば、それで充分である。（中略）村マネアバの特定のボス区画に参加する一般原理は、成員権の所属（membership affiliation）に基づいている。（中略）所属の原理は「浅い」血縁関係もしくは直接的な婚姻関係の認定に基づいている（Lundsgaarde 1978: 72-73）。

この記述はほぼN村のイナキにもあてはまる。しかし彼はノノース（Nonouti）環礁を事例とした別論文で、「（ボスの集団は）その代表を通じて、公的な福利や共同体の意志決定プロセスにおいて、ひとつの政治的な単位として活動する（Lundsgaarde 1970: 254）」と述べている。少なくともN村で私が観察した限り、イナキ

成員をひとつの政治的単位として見なすことはできない。N村では、異なった世帯に属する同一イナキの成員が相互につながっておらず、イナキは政治的単位とはなっていない。単に世帯の既婚男性が、マネアバの集会に参加する権利を保障するのみである。この差異は、タビテウエア・サウスとノノースという島の違いによるものかも知れない。そうであるならば、タビテウエアでは各世帯の独立性がきわめて強いことを示すことになろう。もし仮に、ランズガードがノノースに限定せずに記述しているならば²⁶⁾、ボスやイナキを独立した社会集団として、過度に実体化するという誤謬を犯していることになる。N村のイナキは、現代の小家族世帯ごとの居住形態に対応したマネアバの座席であり、同じイナキに座る者たちは緊密な親族集団を形成していない。そしてイナキの権利は単に、村の居住と結びついているのである。

世紀の変わり目頃、人々は植民地行政によってラグーン沿いの道路脇に移住させられた歴史的経緯がある(風間 1999a)。そのため、現在の居住地は旧カーインガとはまったく一致していない。このような変化に伴い、旧カーインガは、神話的な先祖からの系譜やイナキとの結合を失い、単なる土地になった。つまり、特定の土地(旧カーインガ)とイナキとのつながりがなくなったのである。結果として、先住の村人との血縁関係が認定されて村の居住が認められれば、村マネアバに入ることができ、イナキを保持できるのである。

3-4. 行政末端としての村マネアバ

以上みてきたようにN村マネアバのイナキは、モードやグリンブルの再構成した民族誌とは著しく異なった様相を呈している。N村では、村マネアバにおける一部のイナキのみに職能が伴っていた。村マネアバにおけるイナキの職能は、現代の村落のなかで「より古い」ものと人々にみなされている。すなわち、過去から引き継いだ要素と歴史的に受け入れてきた要素が入り混じり、再編成されて現在の村マネアバのシステムが成立している。これより以下、歴史的に受け入れてきた要素である、村マネアバに伴う行政的な機能について論じる。

村マネアバは行政府の末端として村人を統合し、中央政府からの情報を伝達する機能を有している。おそらくその機能をもつがゆえに、歴史的に植民地時代を経て村マネアバが存続し得たのであろう。植民地行政府は文化政策としてマネアバを保護しようとしたのではなく、間接統治をする上で保護政策以上の実質的な便宜のために、既存のマネアバ・システムを利用したと私は考える。

N村では、基本的に村マネアバと教会マネアバの2つを使い分けている。村マネ

アバは宗派を越えた公共の目的に使われる。村代表のカウンシラ選挙，大統領選挙，首都からの政治家の訪問，村への来客歓送迎，日常的な行政府オフィスからの情報伝達は，主に村マネアバで行っていた。また，首都から来た医師や歯科医師の巡回，島在駐の看護婦による乳幼児健診などを行うのも村マネアバであった。

ただし，N村はカトリック信徒のみなので，村マネアバはしばしば教会のマネアバに代替する機能を果たす。例えば，日曜日のミサ後の共食において，従来ならばカトリック教会マネアバを使用するはずが，屋根が穴だらけで雨漏りがしたり，ブタに荒らされてココヤシ葉マットを敷いた地面が凸凹になったなどの理由で，村マネアバを代わりに使用することがあった。しかしキリバスでは，カトリックとプロテスタント信徒がひとつの村に共住する方が普通である。その場合，村と教会のマネアバは厳しく使い分けられる。宗教に関わらない村マネアバが，行政府からの連絡事項を伝達する唯一の場となる。その例を私はニクナウ島で観察した。私の滞在したニクナウ島のM村はプロテスタント信徒が多数を占めていた。両宗派信徒は対立していたが，行政府からの情報伝達（*kaongora*）のときだけは宗派を問わず，関係者が村マネアバに集まるのだった。日常的には両宗派信徒ともにそれぞれの教会マネアバを使用しており，村マネアバには人気がなかった。

村マネアバが行政単位の村と連結していることを明確に示す例がある。タビテウエア・サウスのK村は1950年代半ばにN村から分離し，独立した行政単位の村となったという。そのとき，同時に村マネアバが新たに建築されたのである²⁷⁾。つまり，村マネアバとはいっても，K村マネアバの歴史はきわめて新しいことになる。新たな独立した行政単位となることが，マネアバを必要たらしめたのである。

中央政府の立場からすれば，自らの情報（*rongorongong*）を伝達する受け口を必要としていたと考えられる。つまり，後述するカウンシラ・マネアバの出張所として，村マネアバは政府から変形，利用されている。一方，村人の側からみると政府からの情報を受け取り，それを吟味する場として村マネアバを利用し，内外の状況に対応していると考えることが可能である。村の外部と村の接点に村マネアバは位置している。タラワから村へ役人が来ると，まず村マネアバへ通される。先導するのは村の長老とカウンシラであり，役人はマネアバのラグーン側に座る。まず，食事が出され情報を伝える。そして村側からの出席者が質問をし，話し合いが続く。村のカウンシラも，カウンシラ・マネアバで話し合った内容を村マネアバで人々に伝える。国会議員が帰島したときにも，議会の状況を村マネアバで報告する。村人たちは長老を中心に話し合い，村としての意見をまとめる。

現在の村は、カーインガが複合した旧来の共同体が歴史的に再編されて形成された。つまり村は、政府に連なる行政単位であって、必ずしも自然発生的共同体という歴史的連続性を必要としない。このうち村側の組織的行動は、主に村マネアバにおける長老を中心とする合議によって、検討され決定されるのである。

4. 「新しい」 マネアバ

4-1. カウンシラ・マネアバ (*mwaneaba n te kauntira*)

タビテウエア環礁は、ひとつの島が2つの行政府に分割されているキリバス離島部で唯一の島である。しかし、かつて島はひとつの行政地区であったという²⁸⁾。島行政府の中心は島北部(現タビテウエア・ノース)にあり、南部(現タビテウエア・サウス)は行政府から遠隔の地にあった²⁹⁾。現在、タビテウエア・サウスの中心地は B 村端にあるテオボキアである(第1章)。そこには行政府の事務所など、公共建築物に加えて、カウンシラ・マネアバといわれる巨大なマネアバが道路沿いに建っている。正確な年は不明だが、人々の話によれば、島が2つの行政府に分割されるより以前にカウンシラ・マネアバは建てられていた。

南北行政府の分離以後、テオボキアはひとつの行政地区の中心として独立した位置を与えられた。それに伴い、カウンシラ・マネアバの重要性が増したと考えられる。N 村のアントニオやキマエレによれば、昔はボータキや合議のためにカヌーで島北部(現タビテウエア・ノース)へ出かけていったという。1979年の独立後もしばらくの間、独立記念式典はノースのみで行われていたという。N 村の女性ターラウ(20歳代)は幼少の頃、独立記念日にはサウスからカヌーを使って出かけていったという。彼女はその状況が大変だったと語った。現在では、タビテウエア・サウス6村に関わる会議やボータキは、すべてカウンシラ・マネアバを使っている。

カウンシラ(*kauntira*)とは英語の *councilor* のキリバス語であり、村ごとに選挙で1名ずつ選出した各村代表である。さらに、6人の中からカウンシラ長が選ばれる。カウンシラ・マネアバとは、したがって、字義通りにはこの村代表のマネアバを意味する。しかし、実際にカウンシラ・マネアバで行われるボータキや合議では、各村の長老や狭義のロロブアカ³⁰⁾が参加し、強い発言権をもつ。カウンシラたちは時折、長老の後方で発言するのみである。カウンシラは大抵、40歳代の男性であり、年齢が上の長老に圧倒されている感がある。彼らは中央政府と島、村の橋渡し役を務め、合

間に挟まれているのである。村ではテオボキアの情報を長老たちに説明し、説得したり意見を聞く役割を担う。

カウンシラのみならず、テオボキアの公務員やクラーク (*kiraka*)、さらには国会議員 (*tia tei*) でさえも、長老たちを説得するには困難を伴う。1994年8月に私と妻が、予備調査で初めてタビテウエア・サウスに上陸したとき、クラークを務めていたベン (ブタリタリ出身者) が小声の英語で、「本当は、長老会議は公式の権限をまったくもっていないのだ」と愚痴を言っていたことが強く印象に残っている。タラワの中央政府から派遣されてきたクラークは、島では単なるよそ者に過ぎない。カウンシラ・マネアバの主役は、テ・ウエア・ニ・カイ (*Te Uea ni Kai*) という名称をもつ6村の長老会議である。

カウンシラ・マネアバにイナキはない。6村の長老やカウンシラが集まるとき、村ごとに割り当てられた座席に座る。例えば N 村住民は常に東南隅付近に座席を割り当てられている。このマネアバには、長老や狭義のロロブアカのみが村に割り当てられた座席の前列に座ることができる。来客や公務員などはラグーン側の席を与えられる。

さて、カウンシラ・マネアバの使用目的をあげると以下ようになる。

- 1) 独立記念日関連のポータキ
- 2) 島全体で迎える来客 (着任してきた公務員、土堤工事関係者、外国人、政治家などを歓迎するポータキ
- 3) 島行政府などからの賃労働の割り当てに関する合議
- 4) 島全体に関わる事柄 (多くは中央政府から島においてきた政策に関連する) の合議、説明会

1) と 2) については別稿 (風間 1999b) で論じたため、ここでは 3) と 4) について具体例をあげる。

各村への賃労働の分配

1992-93年頃、日本からの援助で漁具を売るための店舗がテオボキアに建設された³¹⁾。日本人現場監督を歓迎するポータキを開いた後、仕事の割り当てについて話し合いがもたれた。日本人監督は、定まった期間内に建設を終えたかったため、24時間3交代制で島の人々を雇用して作業することにした。カウンシラ・マネアバにおける長時間の話し合いの結果、6村の男性に均等 (ポーラオイ [*boraoi*]) に仕事を配分することに決定した。すなわち、1日目の最初に A 村、次に B 村、最後に C 村の男

性が作業を担当する。2日目はD村、E村、F村が行う。3日目には一巡して、再びA村、B村、C村という具合である。しかも1日目と3日目の労働者は異なる。村の中でもローテーションで均等に労働が割り振られたためである。監督は常に違う顔ぶれの労働者に、繰り返し仕事の要領を教えねばならない。あまりにも効率が悪いので、同じ労働者が再び仕事に来るよう要請したという。

この話に限らず、学校校舎などの建設、船荷の積み降ろし、土堤道路補修作業など、同様にカウンセラ・マネアバで話し合いがもたれ、均等になるよう調整が行われる。私が調査を始めた1994年8月からは、ラグーンと外洋の間で海水が行き来できるように、アイレット間を結ぶ土堤道路に穴を開けるチャンネル造成工事が行われた。この際も、北端の村から南へ順に仕事を回し、すべての男性が作業に参加して報酬を受け取れるように決められた。N村のなかでは、居住地によって3つの作業グループが作られ、日毎に交替で作業現場へ通うように調整された。もし村間に不均等（ボーブアカ [bobuaka]）があると話し合いは紛糾し、誰もが納得いくまで話し合うことになる。

冷凍庫の誘致

キリバスでは、日本からの援助で幾つかの離島に冷凍庫が設置されている。タビテウエア・ノースにもあるという。1995年7月、カウンセラ・マネアバの合議において、議題として冷凍庫の問題が採りあげられた。まずノースに冷凍庫があって、サウスにないのはボーブアカであるとの発言があった。そして、ノースよりも大きな冷凍庫を設置してもらうように、中央政府に要請（ブブシ [bubusi]）しようということになった。仮に冷凍庫を設置したとして、それを皆のためにどのように利用するか、次の話題となった。島の中北部には、島の人々が共有する大きな人工池が造成されており、そこでミルクフィッシュ（*Chanos chanos*）を養殖している。その養殖を本格化し、捕獲した魚を冷凍保存して売買するという意見が出された。その売り上げ代金を島行政府の資金にしようという提案である。

ここで問題になったのは、仮に魚を冷凍保存し販売したところで、人々が正規の値段で買うかどうかであった。ある公務員は先の漁具店の話を持ち出した。当初は必ず金を払うことが条件だったが、結局、掛け売り（ターラウ [taarau]）が横行してしまった。親族のいない別の島出身者を店員にすれば、ターラウは防げるのではないかと、との意見も出された。しかし公務員は、島の住民が「これは我々皆の魚である」とターラウを要請したら、別の島出身者であっても、断れるものではないと反論した。

この話は結論が出ないまま、冷凍庫のブジンだけが行われたようである。

以上の例からも、中央政府と島住民の接点にカウンシラ・マネアバが位置することがわかる。ここでは、クラークのいう「公的な権限のない」長老会議が主導権を持っており、ポーラオイという強固な平等理念が支配している。そのため、カウンシラ・マネアバの合議を経て、賃労働は各人均等に分配される。また、冷凍庫などの援助物資に関しては、政府や援助側よりもむしろ在地側の主導で話が進められていく。つまり、中央政府を経由した海外からの援助、政府の政策などをときに遮断し、あるいは在地理念を付加して島に受け入れ、島内に取り込む場としてカウンシラ・マネアバはある。中央政府の権威と機能（すなわち FFAB 経済の B）は、カウンシラ・マネアバとそこを支配する長老の存在によって、島の社会内部にまで充分には浸透し得ないのである。

4-2. 学校マネアバ (*mwaneaba n te reirei*)

村人が英国植民地政府の悪口を言う際、離島部で学校教育を行わなかったことを指摘することがある。タビテウエア・サウスにおいて、政府によって初等学校が作られたのは独立後約10年を経たからのことである（第1章）。

タビテウエア・サウスには初等学校が4校ある。最も大きな学校はN村内のB村との境界近くにあり、主にN村など3村の子供たちが通っている。4つの学校のうち、ひとつの学校については確認できなかったが、少なくとも3つの学校にはマネアバが付随している。学校マネアバは、学校ができたときに建設されたものである。公立の初等学校ができる以前は、教会の学校を運営するための合議に教会マネアバが使用されていた。

学校マネアバにおいては、着任してきた教員の歓迎、離任する教員の送別のポータキを行うほか、長老やロロブアカから選ばれる村の学校委員 (*komete n te reirei*) と教員による合議、年度終了時（12月）のポータキなどに使用される。教員のみを集会を除くと、ポータキを開催する際に主催者となるのは各村であり、食事の準備も村の女性が行う。その場合、教員たちは客として扱われる。学校マネアバは学校に付随しているが、運営は教員によるのではなく、委員を中心とした村住民によって主に行われている。委員はカウンシラのように、学校の話をついに村に持ち帰って人々に伝える。必要があれば村や学校マネアバで合議を開き、その決定に従って話が進められていくのである³²⁾。

学校マネアバは学校に付随しており、教員中心のものであるはずだが、カウンシラ・

マネアバと同様に、実質的な運営は住民の側に委ねられている。つまり、学校に関しても長老やロロブアカの発言が強い影響をもつ。学校にせよ島政府にせよ、外来の制度と在地の制度の接点にマネアバが存在し、そこでは在地の論理が卓越しているのである。

4-3. 教会マネアバ (*mwaneaba n te aro*)

キリバスでは私の知る限り、キリバス・プロテスタント教会 (KPC) およびカトリック教会のあらゆる礼拝所にマネアバが付随している。通常、礼拝所のすぐ傍らか、道路を挟んでマネアバが建てられている。カトリックと KPC 信徒の共住村では、それぞれの教会にマネアバが付随しているので、村マネアバを含めて少なくとも3つのマネアバがあることになる。人口規模の大きな村では、教会信徒の下位グループ (*makoro*) が独自にマネアバを建てることもある。この場合、社会集団の分節化に伴った新マネアバの建設と解釈できる。

N 村にはカトリック信徒のみしかいないので、村住民と教会信徒が完全に重なり合う。私が滞在した時期には、説教師も村出身者であった。教会関連の問題は、村の長老や狭義のロロブアカ、説教師が話し合う。若い既婚男性から任命される委員 (*komete n te aro*) は、教会関係の雑事を任される。教会マネアバは、日曜日のミサ後の共食、来村した教会関係者の饗応、献金集めなどさまざまなポータキに利用される。カトリック教会女性団体 (Te Itoi ni Ngaina) のビンゴ大会が開催されたり、首都のカトリック教会本部へ送る手芸品製作の作業を女性たちが行うこともある³³)。また、クリスマスなどのポータキで行われる合唱や踊りの対抗戦に備えて、練習 (*rei*) を行うのも教会マネアバである。説教師のテイオーキによれば、彼が幼少の頃、教会は踊りを性的にいかかわしい行為につながるとして禁じていたという。人々はブッシュへ行ってこっそりと踊りを楽しんだとのことである。しかし今は、人々が平和的に楽しむために踊ることを教会は禁止しない。N 村にイタリア留学から帰省中の若い神父がやってきたときも、教会マネアバで踊りをして饗応した。今は踊りに対して「開いている (E uki)」という。

歴史的に見るとタビテウエアでは19世紀後半、アメリカからプロテスタント布教団が上陸した。19世紀末に激しい宗教戦争が起り、ポリネシア人の宣教師が率いる環礁北部のプロテスタント勢力が、南部のシオバ信仰 (*Anti n Tioba*) の信徒を虐殺した³⁴)。そして一時的に全島住民がプロテスタント信徒になったが、皮肉にも結局はカトリック信徒多数の状況に落ち着いたという (Maude and Maude 1981)。キリスト

教が定着して後、今世紀初頭には、フランス人神父が異教的な慣行や、村マネアバへの信徒の出入りを厳しく禁じた。カトリック教徒がマネアバに入ったならば、破門にされたという。神父による禁止が、社会・文化的に強いインパクトを与えたとゲッデスは主張する（Geddes 1983: 39-41）。

歴史的な紆余曲折があったにもかかわらず、現在、ヨーロッパ人の持ち込んだキリスト教とマネアバ・システムは、複雑に融合しているかに見える。一見、教会の態度は寛大であるが、基本的にはあくまで教義に反しない「伝統」だけを容認している。例えば通常、教会は初潮儀礼を悪習と見なす。説教師の資格を持つテカエワウアは、娘の初潮儀礼時に村全体でポータキを行うことを避け、親族だけで小規模に行ったという。ここで指摘したいのは、圧倒的な影響力を持つ教会上部組織による巧妙な支配構造である。例えば、プロテスタントでは各村ごとに直接的に献金額を割り当てており、タラワの教会へ送金することを義務づけている。その集金のために人々は奔走し、村の教会主催で献金集めのポータキを開催する。またプロテスタント説教師は島外出身者であるため、毎日の食事の用意を村の信徒が持ち回りで行わねばならない。カトリックでもタラワの教会の要請により、踊り用の腰巻きマットを作ったり、教会付属の土産物店に並べる手芸品を無償で送らねばならない。さらに、クリスマスなどキリスト教関連のポータキが教会マネアバで行われ、神父の来訪時には歓迎ポータキが行われる。このような上部組織による支配構造は、次の2点に要約できる。

- 1) 教会マネアバ・システムは、あくまで教会が容認する限りのものである。
- 2) 教会マネアバが信者の結束を促し、教会のための協同労働や献金を行うのに便利な状況を作り出している。

一方で、教会マネアバ・システムは上部の支配下にありながらも、村や島レベルにおける人々の主体的な活動によって支えられていることを見逃すわけにはいかない。そこでは、あらゆる社会活動と同じく、長老を含む既婚男性が合議によって物事を決定し、協同労働によって目的を達成する。教会上部組織と直接的には無縁なN村カトリック信徒の主体的な活動として、次の第5章ではカトリック・マネアバ新築作業をみとめる。

5. カトリック・マネアバの新築

私がN村に滞在していた期間中に、村のカトリック・マネアバの新築作業が行われた（風間 1999a）。それまで使用していたマネアバは、パンダナス葺き、地床式の

建築物であり、しばしば雨漏りしたり床をブタに荒らされたりしていた。さらに他村のカトリック信徒が参加するポータキを開催するには狭すぎることもあり、村マネアバで代用することもしばしばあった。そこで、より大きなマネアバに建て替えることになったのである。1995年の新年が明けてから、カトリック・マネアバ新築の話が具体化した。幾つもの準備段階を経て、実際に古いマネアバを取り壊し、建設に着手したのは1995年11月のことであった。私たちが去った1995年12月時点では、マネアバの骨組みがほぼできていたが、完成には至らなかった。ここでは、マネアバで行われる合議と同意形成の様相、協同作業の様相をみるために、マネアバ建設に至るまでの過程を記述する。

マネアバ新築までの過程は、4つの段階に分けることが可能である。ほぼ時系列的に進行してはいるものの、前後の段階と相互に時間的な重複があった。

- 1) 石柱の切り出しおよび運搬作業
- 2) 村の3グループによる資材調達
- 3) 建設資材購入用の資金調達
- 4) 取り壊しおよび建設作業

新築計画の当初は、マネアバの屋根を従来のパンダナス葺き屋根にするという話であった。そのため、村の女性たちは供出用の屋根葺材の製作に勤しんでいた。ところが、遅くとも2月末にはトタン屋根にするという話になり、葺材の製作は行われなくなった。この経緯については情報を得ていない。ただし、首都タラワは当然のことながら、タビテウエア・ノースをはじめとする多くの離島部においてもトタン屋根、コンクリート床の教会マネアバが増加しており、村人がその影響を受けたことは確かである。また、タビテウエア・サウスにはこれまでトタン屋根のマネアバが建てられたことはなく、これが初めてとのことであった。私がなぜパンダナス葺きのマネアバにしないのか質問したところ、タータヤアントニオは、トタン屋根の方がいつまでも丈夫であり、葺材を作る女性がつらくない(A aki kainnano aine)からよいのだという。そのかわり、従来のマネアバ建設には必要でなかったトタンなどの購入資金を調達するためにさまざまな活動が行われた。

5-1. 石柱の切り出しおよび運搬

多くのマネアバは重い屋根を支えるため、パンダナス柱のみならず、石柱(*bouan atibu*)を用いている。まず石選びからマネアバ建設準備が始まった。

石柱切り出し作業

〈1995年1月24日〉朝8:00頃、集落を出発し外洋側の浜へ向かった。最初のメンバーは、アントニオ、テイオーキ、テバレレイ、カーモキ、タカレブ、テカエワウア、私の6人だったが途中、テカイワが加わった。またテバレレイはいつの間にか姿を消してしまった。テイオーキにその日のメンバーを尋ねると、長老のみであるとの返事が返ってきた³⁵⁾。外洋の浜に到着するとすぐに岩盤を見て回る。島のラグーン側は砂浜からなるが、外洋側は灌木の生えた砂浜のすぐ外側を珊瑚性の岩盤が覆っている。岩盤はそのままリーフフラット（礁原）に連なっている。長老たちは、岩盤のひびの入っていない適当な箇所を探し、棒を使って大きさを測る。

集落に戻り、アントニオの住居で簡単な共食を行う。テバレレイの妻がお茶を運んでくる。テバレレイは、妻にお茶の用意をするよう伝えに行ったため、途中で去っていったようだ。長老のキマエレがやってくる。いつ石の切り出しをするか、何を持っていくか話し合う。26日早朝作業を開始し、朝食に板状パンダナス保存食トゥアエ（*tuae*）とココナツ果肉を混ぜて固めた団子タンガナ（*tangana*）、紅茶などの入ったポットを持っていくことに決まる。なお、作業の前夜は、全村人がマトゥ・ラオイ（*matu raoi*）でなければならぬという。この語を直訳すれば、「よく眠る」である。作業前夜は、食後21時には床に入り、静かに眠らねばならない。夜中の食事、喫煙、カードなどの遊び、性交は禁忌とされる。破る者がいると事故が起きたり、けが人が出るという³⁶⁾。

〈1995年1月26日〉(04:50) テイオーキが私を起こしにくる。まだ夜明け前、周囲は真っ暗である。その後、道すがら次々と6人の長老およびロロブアカを起こして回り、バコアの住居へ向かう。バコアの家は、主要道路から外洋側の石切場へ続く別れ道の分岐点に最も近いため、ここが集合場所になった。バコアの高床家屋でお茶を飲み、タバコを吸い、長老、狭義のロロブアカが集まるのを待つ。

(06:00) 日の出前、空の一部が赤くなり始めた頃、浜へ向かう。キマエレらによるとマトゥ・ラオイのほかにも、石切の労働には、幾つかの禁忌が課せられるという。

- 1) 集落から浜へ出るまでの間、仮に人に会ったとしても会話を交わしてはならない。
- 2) 個々ばらばらに浜へ出てはならない。皆一斉に浜に出る。
- 3) 魚を食べてはならない³⁷⁾。また
- 4) 女性は浜に立ち入ってはならない。どれかが破られると、石柱が折れたり、けが人が出るという。

浜に出る手前の灌木の茂みで一休みし、ちょうど日の出に合わせて一斉に浜へ出た。その前に禁忌を知らぬ私1人が浜へ出ようとしたら、たしなめられてしまった。浜へ

出ると、まず座って神へ祈りを捧げ、持参したタンガナとお茶で食事を摂る。この時点で私を含め、長老および狭義のロボアカと未婚のテカイワの計13人が集まっていた。なぜタンガナを食べるのか尋ねると、タンガナは労働の食事 (*amwarake ni mwakuri*) だからという答えだった。またカイウエアは、金を使わなくて済むからと言っていた。

(06:30) 三々五々作業を開始する者が現れ、遅れて集落から数人のロボアカがやってきた。作業は2m近い長さの鉄製掘削棒 (*koro bwa*) および鉄斧 (*tanai*) で石を砕くという重労働であった。男性たちは、3つに分かれて作業を行った。

(08:30) 石柱となる3つの石塊が岩盤から切り離される。何本かの鉄棒をてこにして割れた石を持ち上げ、完全に岩盤から切り離す。疲れた人は休み、それまで休んでいた人と交替して労働は続いた。

(10:15) 既婚未婚を問わず、若者が一斉に作業場へやってきた。若者は14,5人がかりで切り出した石柱を、木の棒とロープを使って陸まで運ぶ。伝令役のポーカイが女性を集落まで呼びに行く。

(11:30) 女性たちが米、スワンプタロ、パンなどの食事を持ってくる。男性たちは陸に上がり、めいめい食事を摂る。

(12:40) 作業を再開する。午後は主に若者たちが働いた。石切および石柱運搬作業が続く。女性たちは陸でおしゃべりを楽しんでいる。

(16:30) 潮が徐々に満ち始めてきて、この日の作業は終了した。

石柱の大きさは、長さ約2-2.6m、幅0.6-1m、厚さ0.15-0.3mであった。翌日も同様の作業が行われた。その後も断続的に石切作業が行われた。当初16本と私は聞かされていたのだが、結局、12本の石柱を切り出した。

石柱運搬作業

〈1995年6月8日〉 外洋側のブッシュには5本の石柱が置かれたままだった。残りは私たちがタラワに滞在している間(3月初旬から5月中旬)にバコアの住居近くの道沿いまで、すでに運搬されていた。6月7日夜もまた、マトゥ・ラオイであった。

(08:40) 教会のベルが鳴った。男性を作業へ向かうよう促すためである。

(09:10) 男性たちがぼつぼつと徒歩や自転車でバコアの家へ向かっていった。テカエワウアによると、これは若者のみが行う仕事だという。外洋からラグーンまでの道のりをロープで縛った石柱を棒で担ぎ上げて運ぶ労働であった。約1,000kgほど重量のある石柱を人力で運搬するのは容易な作業ではない³⁸⁾。

(13:00) 3個の石柱を運搬した後、バコアの高床家屋において、各自が食料を持ち寄るポータキがあった。

1週間後の6月15日に最後の石柱を、若者のみならず長老も含めて運搬し、計12個の石柱がバコアの住居近くに置かれた。この日もバコア宅で同様のポータキが行われた。

〈1995年9月27日〉集落南部のバコアの住居近くに置いてあった石柱は、しばらく放置されていた。3ヶ月ほど経ってから、集落北部にあるカトリック教会まで、カヌーを使って石柱を運ぶ作業が主に若者によって行われた。9月11日を皮切りに、12日、15日、26日と石柱運搬作業があった。早朝行う際には、既婚の若者のうち各グループ（後述）ごとの代表3人（ポーバイ、タウアニコナ、テイテイ）が人々を起こして回った。

(10:00) 男性たちがバコアの住居へ向かい、石柱を浜辺まで運んで運搬の準備を行った。

(17:00) 潮が満ちてきたため、教会のベルが鳴った。再び男性がバコアの住居へ向かう。2艘のアウトリガー・カヌーでそれぞれ1個ずつの石柱を運ぶ。先頭のカヌーは櫂で漕ぎ、後続のカヌーは帆で進んでくる。アウトリガーと舟体の間の海面下にうまく石柱を吊してバランスをとり、時折カヌーから降りては押して進む。教会近くの浅瀬で石柱を降ろし、この日は陸に運び揚げなかった。カヌーは2往復したので4本の石柱を運んだことになる。

翌朝午前5時頃、満潮になり、再びカヌーを使った運搬が行われた。同様の方法で10月3日にも、バコアの住居から教会までの石柱運搬が行われた。

5-2. 村の3グループによる資材調達

新しいカトリック・マネアバは、在地の材料と輸入物の組み合わせから成っている。屋根部分には輸入角材も用いられたが、ココヤシ材も必要であった。また、支柱には、石柱のほかにパンダナスが用いられた。これらの在地物の調達は、村を3分した教会グループ（*makoro*）単位で行われた。これらのグループは以前からあり、ほぼ現在の居住地別に村を分けている。それぞれ名前もあり、北はテ・マリタウ（Te Maritau）、中はイーシマルーベ（Iitimarube）、南はカウスタエカ（Kautitaeka）という。しかし通常は、グループを指示する場合、グループ北、中、南（Kurubi Meang, Nuka, Maiaki）とよんでいた。ここでは北グループ、中グループ、南グループと表記する。また、後述の資金集めもこれらの3グループが中心になって行っていた。

〈1995年5月22日〉中グループがココヤシの木を2本、切り倒す作業を行った。このグループの中心となる長老はキマエレであった。

(09:30) キマエレ、タウアニコナらが斧を持って村の北はずれのブッシュへ向かった。集まったのは13人の男性であった。そのなかには2人の未婚者（カイウエアの息子バケス、カーモキの息子サレー）がいたほかは、すべて既婚男性であった。バケスの父であるカイウエアの姿はなかった。

(10:00) 高くてなるべくまっすぐなヤシの木を探し、キマエレおよびサレーが簡単に切り倒す。そして即座に斧で樹皮を剥ぐ作業に入る。

(10:30) 半分皮を剥いだヤシの木を中央から半分に切る。ヤシの葉を使って幹を回転させ、樹皮の残っている側を上にする。

(10:40) サレーが別のヤシの木に登り、ロープを幹に縛り付ける。キマエレおよびテガウンが斧を入れる。

(10:55) ロープを引いてヤシを倒す。この頃には、最初のヤシの皮むきがほぼ完了する。

(11:30) ほぼ作業を終える。後日、ヤシの材木を浜に運んで行き、ラグーンの海水に浸けていた。海水に浸けると材木は固くなり、腐りにくくなるのだという。

翌23日には、北および南グループによるヤシの木切り倒し作業が行われた。ところで、村の3グループ成員間には競合意識がある。北グループによるヤシの木の加工作業を横目に見て、私と妻が通り過ぎようとしたとき、作業していたボーカイが私たちに向かって、「どうして中グループの作業だけ見て、北グループには来ないのか」とやや強い語調で言った。村をグループに分けると、いつもこのようなライバル間の競合に私たちは巻き込まれてしまう。どうにかして自分たちのグループに私たちを引き寄せようとし、他のグループには行くなという。そして他のグループからは、どうしてあのグループのところばかり行くのか、と責められるのである。5月31日には、北グループが隣村からチェーンソーを借りてきた。次は中グループ、そして南グループもチェーンソーを借りるということだった。

5-3. 資材購入用の資金調達

タビテウエア・サウスにはトタン屋根のマネアバはなく、村人は輸入資材を使ったマネアバ建設の経験はない。しかし、トタンとセメントを使った民家が、B村に僅かにあるほか、N村内にも1軒の民家、教会の礼拝堂および商店（倒産した後、しばらく放置されていた）がある。さらに島カウンシラの賃労働として、学校校舎やテ

オボキアの公務員宿舎建設に人々は従事しており、トタンやセメントを使った建設の経験を、多少なりとももっている。またナウル（Nauru）出稼ぎ経験者の中には、建設労働に従事していた者も僅かにいる（風間 n.d.）。このような技術や知識が、輸入材を使ったカトリック・マネアバ建設を可能にしている。

建設技術の問題は少ないにしても、輸入資材購入資金の問題が残る。カトリック・マネアバ新築には、在地調達石柱や材木、ヤシ縄のほかにも、屋根用のトタンや角材、釘、床用のセメントが必要であり、その購入資金が必須である。私たちが島を去ったときにはまだマネアバ建設の途中であり、資材もすべて揃っていたわけではないため、実際にどれだけの資金が必要だったか正確にはわからない。当初、村人がいうには、資材購入に3,000-4,000豪ドルかかるとのことであった。隣のB村のプロテスタント教会やニクナウ島では村の教会信徒経営の商店があり、教会に関する資金調達に一役買っていた。しかしN村には、私たちの滞在していた時点で教会経営の商店はなかった。資材購入資金を得るために、前述した3グループが幾つもの手段で資金を集めてボータキで供出したり、村全体で資金調達のためのボータキを開催して、物資購入資金を蓄積した。また、1995年に行った学校の教室および看護婦の家屋建設の賃労働収入は、当初は個人に分配されるはずだったが、結局、資材購入資金に回されることになった。資材購入は、集めた金を村出身の国会議員がタラワへ持っていき、物資を買って船で島に輸送するという方法をとった。この節では、村内3グループの資金調達について記述する。

グループ活動の詳細を知るには、ひとつのグループについて徹底的に調べることが最も適切な資料収集方法であろう。ところが、ひとつのグループのみについて調べることは、他グループ成員の妬みを買うため、現実には困難であった。かといってすべてのグループの活動を追うこともできなかったため、ここでは断片的に得た情報を提示する。

魚やパンダナス・マットの売買

私の知る限り、6月初旬から各グループによるさまざまな資金集めが始まった。このうち、魚、太編みパンダナス製マットを売買するのが主要な集金源であった。

〈1995年6月23日〉村の多くの女性たちが一斉に太編みパンダナス・マット（ro-ba）、トディーシロップ（kamwaimwai）でココヤシ果肉を固めた団子トンゴ（tongo）などを持って、村の外へ出ていった。北グループの女性は北端の村と土堤工事関係者へ、中グループはテオボキアの公務員へ、南グループは学校教員へ売りに

行った。マットは1枚10-25豪ドルで売ったという。

〈1995年6月28日〉この日は3グループすべてが漁に行った。南グループは昼間、釣棒 (*kaukamea*) やウツボ用笠 (*uu*) を使った漁を行い、タコやウツボを獲ってきた。タコ3豪ドル、ウツボ5豪ドルで学校教員に売ったという。夕方、村共有の舟外機を中グループのヨアキムが教会から借りていった。夜から朝にかけて網漁をするとのことだった。一方、北グループは釣り竿をもって外洋方面へ向かっていった。魚は売買用であり、ほとんど自分たちの取り分はないため、漁は盛んなのだが村では自家消費用の魚が不足していた。

〈1995年6月29日〉(16:20) テカエワウアの妻ンキアーが私たちを迎えに来た。南グループの4人の若者(メイヤ、テタボ、トンガウア、テイテイ)が舟外機付カヌーで早朝漁へ行ったが、そろそろ帰ってくるという。集合場所のテブアウアの家屋では、アントニオ、テカイワらが来ていた。間もなくボートが戻ってきて、獲物を陸揚げする。

(16:40) タコ、ウツボ、何種かのリーフフィッシュを、米サックを開いたビニールの上に広げて、女性たちが処理を始める。早速、N村出身の臨時教員カロトゥがタコを買っていく。別の教員の息子が14ポンド分の魚、タコ1匹、ウツボ2匹を買っていく。リーフフィッシュは、1ポンド(約500g)あたり35豪セントの値段だという。トアリキとバコアもやってくる。

(17:05) 漁に行っていたテイテイが高床家屋の上で、パンノキ果実とココヤシ果肉を混ぜた団子 (*manam ni mai*) を食べ始める。テカエワウアが来て、舟外機用のガソリンが手に入ったと報告する。私たちも4匹の小魚をもらい、家に帰る。

〈1995年7月13日〉中グループではテガウン、ネアウア、タウアニコナ、タワンガが舟外機付きカヌーで漁に出て、巨大なサメ(人々の話ではゆうに5,6m以上あった)を獲ってきたという。口を開くと、人間が呑み込まれる程の大きさだったという。あいにく私と妻は独立記念日の泊まり込みでテオボキアに滞在しており、そのサメを見ることができなかった。このサメの胃袋には、人の髪の毛が入っていたとか、人の骨盤や頭が入っていたという噂が流れた。人々は気持ち悪がっていたのだが、その人喰いザメも資金調達用に売ってしまった。独立記念日の泊まり込みで込み合っていたテオボキアにも、ネアウアの妻ターラワがリヤカーでそのサメの切り身を売りに来ていた。

ケンボロ (*kemboro*) のポータキ

ケンボロとはギャンブルのキリバス語であるが、ここでは賭け一般を指示するのではなくひとつのゲームを指している。主催者側のディーラーは、20豪セントと引き替えに伏せたトランプカードを配って回る。2枚ずつカードが行き渡ると、次に3枚めを配りながら、先に配ったカードを開いていく。3枚のカードすべてが絵札ならば当たりであり、賞品が貰える。ルールの詳細は聞かなかったが、3枚カードの数字の合計によって、当たりには優劣があるようである。マネアバに集まった参加者数十人が一度に参加する。

〈1995年6月23日〉南グループでは前日夜に網漁を行い、このポータキに備えた。タコ、塩干しウツボのほか、直径15cm程もあるトンゴ、パンダナス・マットなどの賞品を準備していた。

(19:50) ピックアップ・トラックでメイヤが私の家にやって来て、小学校へ向かう。途中、村人を拾っていく。

(20:00) 学校のマネアバに到着する。南グループ長老のアントニオ、テプアウアのそばに私と妻は座る。賞品がマネアバの端に並んでいる。

(20:30) 臨時教員のカロトゥが進行役ビーラ (*bira*; 笛の意) を務める。食事が始まる。村人は自分で持参した食事を摂る。教員や私たちには、皿が用意されている。私の皿にはタコ、ウツボ、米が乗っている。食事中、テルルを中心に南グループ成員の一部が合唱する。

(20:50) 花輪を1豪ドルで売る。それとは別に皿が回ってきて、皆小銭を寄付する。

(21:00) 食事の皿が下げられる。マーンガウエアらがタコなどの入ったヤシ籐 (*ba-ba*)、マットをマネアバ中央に運ぶ。皿やたらいにトンゴを入れ、上にタコを乗せる。ウツボはヤシ籐に入ったままの状態である。マットは4枚、皿は8枚ある。トンゴは合計25個ある。

(21:15) ケンボロ開始。メイヤがカードを配る。私たちも1豪ドル分、5枚のカードを受け取る。メイヤが2巡目のトランプを配る。さらに3巡目を配りながら、前のトランプを開けていく。3巡で1ゲーム終了である。1ゲームごとに勝利者に賞品を渡していく。

(22:15) 3回のゲームが終わったところで、私たちは退散する。賞品はなく手ぶらで帰る。

ケンボロを開催すると、一晩で100豪ドル以上の利益があるという。中グループも6月9日にケンボロを学校マネアバで行った。

ビデオ

タビテウエア・サウスの人々のうち、ビデオデッキを所有しているのは3人だけという話を聞いた。しかも、うち1台は故障しているとのことだった。所有者の1人はN村の長老タータの娘の夫であり、ドイツ船乗組員をしていた。このビデオを使った中グループの資金集めも行われた。1995年7月9日夜、ほぼ一晩中タータの住居ではビデオが上映されていた。1人20豪セントの料金であった。タラワでは50豪セントだったので、かなり低い額である。しかも、電気のあるタラワとは異なって、発電機を一晩中稼働させねばならず、実質5-10豪ドル程度の利益だったのではないかと推測できる。

合唱隊

男女数人が他村の各戸を廻り、合唱しては献金を募ることも行われていたという。具体的にN村の誰が、いつどこへ行行ったかという資料は得られなかった。私の滞在中、島でこの種の合唱隊が他村から来たのは3回ほどであった。各戸に回ってきた合唱隊は2、3曲歌い、小銭を受け取って立ち去る。首都南タラワでは、頻繁に献金集めの合唱隊が各戸に回ってくる。

カオス・マネ (*kaoti mane*; 現金供出) のポータキ

以上のような方法で各グループが得た現金を供出するためのポータキが、日曜日の礼拝後に行われた。7月2日、10月8日の例を提示する。なお7月16日にも予定されていたが、私たちを含む多くの村人は、独立記念日の泊まり込みで村にはいなかった。〈1995年7月2日〉朝からグループごとそれぞれ民家に集まり食事を摂っていた。教会での礼拝後、カトリック・マネアバで集金のポータキが行われた。通常、カトリック・マネアバにおいてポータキがあるときには、人々は村マネアバのイナキと同様の座席位置に座る。ところが今回は、いつもと同じように座った後で、グループごとに集まるように決まり、座り直した。南グループがマネアバの南側、中グループが東側、北グループが北側に移動する。学校教員たちも参加する予定だったが所用があって不在であり、ただ1人、若者(ある教員の息子)が代表者として出席した。

(12:20) 急遽、机と椅子を使うことになり、若者(ブイヨナとシエラ)がタータの家から机ひとつ、椅子4つを運んでくる。

(12:25) 説教師のテイオーキが開会の弁。アントニオが村長老の代表としてこれに応える。各グループ代表の長老(北:タータ、中:キマエレ、南:テブアウア)およ

び教員代表の若者が椅子に座る。

(12:36) 全員が立ち上がり、讚美歌を斉唱する。タータが議長と決まり、挨拶する。その後、リーノの提案でグループごとに讚美歌の対抗戦をする。歌が終わるごとに、手拍子で3本締め。

(12:55) 祈りの後、南グループのアントニオが50豪ドル、中グループのテガウンが60豪ドル、北グループのボーカイが60豪ドルずつ机に持っていき、タータに渡す。教員代表の若者は説教師に50豪ドル渡し、説教師が机に持って行く。金を渡すごとに手拍子、3本締めをする。

(13:35) グループ代表が机を離れて各グループの席に戻る。机と椅子が片づけられる。

(13:40) 食事をグループごとに供出する。米、パン、パンノキ果実のフライ、ラーメン入りスープ、ウツボ、パンノキ果実を甘いきんとん様にした料理 (*tubu ni mai*)、貝入りスープなどがある。これらがマネアバ中央に並べられる。

(13:45) この日はカトリック説教師の研修生が来ていたので、彼が祈りを捧げる。私と妻、説教師、研修生、学校代表、そして村の代表の順に前に出て、セルフサーヴィス形式で食事を取っていく。

(14:10) 食事が終わり、タータとアントニオが一言ずつ感謝の意を述べる。

(14:15) 食事を片づける。説教師から村の長老へ感謝の言葉。

(14:22) ヤシ籠に入った薫製や塩干しの魚が、各グループから出される。若者(南: テルオンナン, 中: タワンガ, サレー, 北: ブイヨナ) が運んでくる。学校教員に協力のお礼として渡す。その後雑談が続く。賃労働(学校校舎建設, 看護婦の家屋建設)の報酬500豪ドルを個々人に分配せず、マネアバ建設資金にあてることに決まる。

(15:00) 説教師の研修生が魚の入ったヤシ籠のひとつを受け取って B 村へ帰っていく。マネアバ新築についての話し合いが続く。建設資材をタラワや外国にいる N 村出身者に懇請ブブシ (*bubuti*) しようという話になる。帰る人も増える。

(16:40) 私たちは家に戻る。ゲームをする人がいる一方で、雑談が続く。

<1995年10月8日> (12:50) 私と妻は少し遅れて行った。各自持参の食事が始まる。

(13:00) 説教師が挨拶する。そのなかで参加者が少ないことへの不満を述べる。アントニオがそれに応じて、理由および謝罪を述べる。多くの男性が、タラワから誘致したアバマコロ交易のタビテウエア・サウス支店開店準備、およびタラワからの商店関係者を迎えるために、カウシラ・マネアバに泊まり込んでいたのである。しかし、それとは無関係の多くの若い既婚者がカヌーの模型 (*makei*) で遊ぶため、浜に出て

しまった。それが、参加者数の少ない主な原因であった。再び説教師が不満を述べる。テブアウアとポーカイもそれに対して一言謝罪する。参加者は、私たちと説教師のほかにテバレレイ、ポーカイ、アントニオ、キマエレ、テカエワウア、トンガウア、カイウエアとその妻たちくらいしかいなかった。ポーカイが、今日は机がない、とおどけて言う。食事前、テバレレイとテブアウアが些細なことから口論したことも、ポータキの雰囲気重くしているように私は感じた。

(13:20) 各グループから代表が中、北、南の順にテブアウア、テガウンに金を渡す。中グループが450豪ドル、北が330豪ドル、南が360豪ドルの合計1,140豪ドルであった。渡すごとに手拍子3回。この金額は、各グループの成員数に応じて割り振られた額である³⁹⁾。その後、私たちが以前要請した小型の細編みマットを、テバレレイから私が受け取る。

(13:45) 説教師が合計額の報告をする。ピックアップ・トラックがテオボキアからやってきて待機している。15時30分までにカウンシラ・マネアバにテカエワウアとテブアウアは戻らねばならないという。

(14:15) 2人が車に乗って立ち去る。

その他

3グループの資金集め以外に村人が資金を集めるためにとった手段が幾つかある。

1) タラワのラジオ放送でメッセージを流して、タラワ在住者や外国船に乗っているN村出身者 (*nati ni kawa*; 村の子供) から送金してもらう。外国まで伝わるのかとの問いに、キリバス近くまで船が来ていれば聞こえる、キリバスに休暇で帰省している船員がラジオを聴き、その後船に戻ったらN村出身者に伝えてくれる、との返事だった。しかし、外国はおろか、タラワから送金があったという情報は私は聞かなかった。

2) 村全体で資金集めのポータキを開催する。このポータキは、船航行 (*kabuti kaibuke*) という名称であった。マネアバを船に見立てて乗客に食事などのサービスをし、乗船料を取るというものである。このポータキの中では、パンダナス細編みマットなどの競売を行って資金を集めた (具体例は、風間 199b を参照)。私たちが立ち去るときに村に置いていったケロンンストーブ、衣類やノートなども、2回目を予定している資金集めの船航行ポータキで売却して資金にするとのことだった。

3) 学校校舎等の賃労働で得た現金を個人に分配せず、建設資材購入資金にあてることも行われた。

このようにして集めた現金は、1995年7月22日時点で計1,700豪ドルあった。現金を国会議員に渡し、トタンや角材を送ってもらう手順を整えた。資材の正確な値段はわからないが、当初の見積金額では不十分のようだった。私たちが島を去る時点ではまだ資金は不足していた。

5-4. 取り壊しおよび建設作業

1995年8月から9月にかけて、相次いで2組の若夫婦がタラワへ行ってしまった。このことを長老たちが問題にした。物や労働の供出はブキ・ニ・パイ（夫婦単位）ごとに行う。夫婦の片方がいれば1単位としてカウントするのだが、2人ともいなくなると単位が消滅してしまう。これはマネアバ新築の労働に支障を来すというのである。それ以降、既婚者がタラワへ行くことを規制することになった。もしどうしても渡航する必要があるれば、皆の承認を得なければならないことになった。これは、長老を中心とした社会集団による個人の行動規制の一例である。

1995年9月21日に船が到着した。積荷には、資金を託された国会議員が首都で購入したトタンや角材が積まれていた。入荷したトタンは52枚あった。トタンが紛失するのを恐れ、荷揚げしたテオボキアからその夜のうちに、村の説教師の家へ運んで保管した⁴⁰。

パンダナス葺きの古いマネアバが取り壊されたのは、11月8日のことであった。その後、本格的な新カトリック・マネアバ建設労働が行われるようになった。11月12日には、アントニオ、テカエワウア、カーモキ、テバレレイ、タカレブ、テプアウア、カイウエアの7人が村マネアバに集まり、しばらくの間泊まり込むことになった。マネアバ泊まり込みは、私たちが去った12月16日時点でも続いていた。建設労働は、石柱を立てるまで3グループのローテーションで行い、それ以降は基本的に男性全員参加で行うようになった。アントニオとテカエワウアは責任者として、毎日作業に参加していた。

〈1995年11月8日〉古い教会マネアバの取り壊し作業が行われた。

(08:30) 最初のベルが鳴る。9時には2回目のベルが鳴り、マネアバの取り壊しが始まる。まず、若者が屋根に登りパンダナスの葺き屋根をはずして地面に落としていく。次いで屋根の細い骨組みをはずす。その後、1本のロープを屋根に結びつけ、一気に引っ張って一瞬のうちに崩してしまう。残ったのは鉄木ミズガンヒ (*ngea; Pemphis acidula*) 製の支柱4本のみであった。屋根の骨組みを構成していた柱を村マネアバへ、不要のパンダナス葺き屋根を海岸へ運んでいく。

(11:30) 教会のベルを鳴らす。村マネアバに集まって、簡素な共食を行う。

〈1995年11月20日〉石柱を立てる作業。男性全員が労働に参加する。午前中にマネアバ四隅にあたる4本の石柱を南西、北西、南東、北東の順に立てる。その順序はマネアバの型によって決まっているという。今回はカトリック・マネアバなので、厳密には何処から立てても構わないというが、N村マネアバと同じタポイアキ型に準じていた。タビアン型の場合には、南東から立てるといふ。最初の柱を立てる前には、説教師が祈りを捧げた。

約1,000 kg ある石柱を立てる作業は容易ではない。石柱を立てる場所には穴が掘ってあり、そこに丸太が差し込んである。石柱を穴に直接差し込んで立てるとすれば、落したり倒れる危険がある。その危険を避けるため、丸太を介在させるのである。まず、石柱を穴近くの地面に置く。次に穴に差し込んである丸太に向けて地面の石柱を引きずっていく。そして石柱の一端が丸太に接するようにする。このとき、穴に立てられた丸太と石柱との接点は、穴の上に位置することになる。次に数人の男性によって徐々に石柱を起こしていく。石柱の下端は丸太に接したまま穴の底にゆっくり滑って降りていく。石柱が立つと丸太は除かれる。さらに穴を少し深く掘り、石柱の高さを調節し、最後に穴を土砂で埋める。

この日の昼食は屋外で摂る。午後からは、残りの石柱を立てる。3日ほどで12本の石柱をすべて立て終える。

〈1995年11月23日〉梁または桁タタンガ・ン・ラパタ (*tatanga n rabata*) を石柱の上に乗せる作業。男性全員が参加する。マネアバの長辺に3本ずつ、短辺に2本ずつ、計10本のココヤシの丸太を石柱の上に乗せ、木釘 (*bokai*) で固定する。東側(道路側)の長辺、西側(ラグーン側)の長辺、南側の短辺、北側の短辺の順に乗せる。村マネアバの建設時には、特定のイナキ成員が木釘を打つのだが、カトリック・マネアバの場合には、誰が打っても良いとアンテレアが説明してくれた。つまり、イナキのない教会マネアバの建設は、村マネアバよりも規範が緩いのである。石柱の位置を調整したり、木釘を打つために開けた穴を合わせるのに手間取り、午前中に始まった作業は夕方までかかってしまった。

16時前、一通り終わったところでポータキがある。食事は前日に団子と指定されていた。トゥアエのタンガナ、小麦粉やパンノキ果実の団子、塩干し魚を女性たちが籠に入れて持ち寄る。教会委員のテイテイが回ってきて、人々から少しずつ団子を集め、説教師に渡す。国会議員の差し入れのキャビン・ビスケットをテイテイとメイヤが配っていく。お茶に入れた砂糖は、教員たちからの差し入れであった。

食事前の作業では、1本の丸太が反り返っているのでもく木釘で固定できなかった。そこで食後、真っ直ぐなヤシの木を切り出しに若者たちがブッシュへ出かけて行った。

〈1995年11月28日〉マネアバ内側に位置する主柱 (*boua n tabu*) を立てる作業。作業後、簡単な食事を建設現場で摂る。この日の食事は、とくに団子という指定はなかった。後に10本の柱が立てられ、11月30日には、その上にタタンガ・ン・ラパタが乗せられた。

〈1995年12月13日〉12月に入ると、輸入角材を使って屋根の骨組みを組み立てる作業が進められた。この日は、屋根頂部に棟木 (*taubuki*) を乗せる作業であった。マネアバの最も高い位置までヤシの丸太を運び上げるため、作業はなかなか進まない。1本の丸太を乗せて固定するのに昼頃から15時くらいまでかかる。残りもう1本の丸太を乗せ終わったのが16時半前であった。

その後、建設現場でポータキが行われた。この日はタンガナなどの団子や塩干し魚を各自が持ってきた。他に、臨時教員のカロトゥヤテオボキアに住む公務員の妻 (N村説教師の娘) からの差し入れである米、コンビーフがあった。コンビーフはカレー粉や小麦粉と混ぜて、スープとして出された。米とスープは教会の委員であるテイテイとポーバイが、各人の皿に分配した。食事が始まる直前に、委員2人は人々から少量ずつの団子を集めて説教師に渡した。また食事中、ポーバイはヤシ縄末供出の女性に、名前を呼び上げて早く出すよう催促した。

食事前には土堤工事の宿舎から女性2人が自転車でやってきた。工事常勤者からの贈与物である50豪ドルを届けに来たのである。さらに、教員たちからの20豪ドルをカロトゥが長老に渡した。アントニオと説教師がそれに対して礼を述べた。棟木の固定は、マネアバ建設が始まった11月以降、最も大きな節目の行事であった。

6. 考察——「在地論理」の場としてのマネアバ——

6-1. 「伝統」とキリバスのカテイ

本論2章では、キリバスにおける先駆的民族誌家であるグリーンブルやモードによる、「伝統的」マネアバの記述について触れた。彼らが想定したのは、村マネアバに相当するヨーロッパ接触以前の共同体のマネアバである。しかしN村の事例を見ると、「伝統的」マネアバに関する彼らの記述と現実の村マネアバの間には、当然ながら大きな

乖離を見て取ることができる。N村のマネアバでは、一部職能をもつイナキがあるものの、マネアバに関する知識はきわめて簡素化しており、イナキのもつ意味合いが過去の民族誌とはまったく異なっている。現在、ある人がマネアバにイナキをもつことは単に村に居住することに等しい。村の居住は、現在または過去の村成員と何らかの系譜関係を辿ることによって認められている。また、他島出身者は配偶者が村成員であれば、配偶者のイナキに座ることができる。民族誌にあるような、イナキの神話や神話化した半神半人の開祖にまで遡る系譜に関する知識は、イナキの成員権を確保するための必要条件とはならないのである。

ただしN村の事例が、タビテウエア・サウスの他村やキリバスのほかの島々の例と完全に一致するとは限らない。ニクナウ島のように、マネアバに関する知識が比較的豊富なところもあれば、タビテウエア・サウスのK村やタマナ島のようにマネアバが行政府の手で再興されたところもある。また、同じニクナウ島でも村マネアバが失われている村さえあることを指摘した(注11参照)。このような多様な状況の中であって、グリーンブルらの「伝統的」マネアバ像と一致する例をみることは、まったくできない。

矛盾するようにみえるかも知れないが、村人は村マネアバをカテイ・ニ・キリバス(*katei ni Kiribati*; カテイとは「伝統、慣習」の意)のうちでも、より古い(*ikawai riki*)ものと見なしている⁴¹⁾。しかし古いことが村マネアバの評価や価値を保証するわけではない。例えば、長老のタータは「昔、キリバスにマネアバはなかった。昔の人々は出会えばいつも喧嘩(*unun*)をしていて、マネアバの作る平和(*raoi*)はなかった。(キリスト教の)光が来てからマネアバができた」と語っていた。このタータ独自の解釈⁴²⁾は、マネアバの成立自体がキリスト教に関係しているというものであり、マネアバが平和をもたらすことを含意しながら、その「古さ」を否定している。また、カテイ・ニ・キリバスとはいっても、キリバスという言葉自体が、英語のギルバートのキリバス語読みであり⁴³⁾、時間的な古さを喚起させない名称である。人々はキリバスの名称を多用するが、かつて諸島を表したというトゥンガルの名称をほとんど使用しない。さらに長老さえも、過去への憧憬を語ったり現在の状況を否定することはほとんどない。むしろ、過去をキリスト以前の邪悪な暗い時代と位置付けるのである。つまり、マネアバに対する高い評価と「古さ」は独立したものであり、高い評価に「古さ」は必ずしも必要とはならない⁴⁴⁾。

カテイという単語には積極的な価値付けが行われる傾向にあり、暗い邪悪な過去からの連続性を汲み取ることは難しい。ここに、民族誌家のいう「伝統 tradition」と

カテイの語には、顕著な相違がある。英語の *tradition* の語には、過去からの連続性が強く付与されているのである。さらに村マネアバのみならず、他のマネアバもカテイ・ニ・キリバスであるといわれる。カテイという語のニュアンスを念頭におけば「マネアバはカテイである」という命題に何ら矛盾や問題はない。古いか新しいかにかかわらず、あらゆるマネアバが等しく人々にとってのカテイ・ニ・キリバスなのである。

既述のように政治家や官僚は、マネアバをキリバスの「伝統」とであると強調する。この言葉は、対外的に発せられるのみならず、国内にも流布している。ここでいう「伝統」とは、英語で外国向けに演説や文章で表現する場合には *tradition* となるし、キリバス語で国内向けに演説するときには *katei* となる。ラジオ放送の国会中継や、島における公務員、国会議員の演説を村人は日常的に聞いており、政府関係者の発言が村人の意識に影響していることは確かだろう。マネアバがカテイであるという表現は、村人も容易に受け入れることができるものである。そして、マネアバが「社会の中心」とであるという見解は、村人と政府関係者の間に大した差はない。ただし、政治家や官僚は外国との差異化を図り、国内の統一および国民の同一性を鼓舞する道具として、「伝統」としてのマネアバを意識的に強調する。そこでは、マネアバやカテイ・ニ・キリバスを固定化してある種の操作を施しているように見える。政府の「伝統」に対する姿勢を示す例として、踊り (*mwaie*) に関する2つのエピソードを紹介する⁴⁵⁾。

1) 1995年、日本で行われる祭りフェスティバルに派遣するため、踊りチームの一般募集をラジオで放送した。当初、7チームからの応募があった。後に、政府側が踊りの服装や装飾品を在地の材料のみに指定し、一般に主流となっているビニールやビーズ製の装飾を禁じたところ、4チームは棄権してしまった。残り3チームのうち、技術的にまともに踊れたのはたった1チームのみであり、選考はあっけなく済んでしまった。

2) 一時期、タムレというポリネシアの踊りが流行した。その頃、マネアバで開催されるポータキの踊りは、ほとんどタムレばかりになっていた。そこで、マネアバではマイエを踊るよう政府が推奨し、結果としてタムレの流行は下火になった。そのため、現在ではクリスマスや独立記念日時にマネアバでマイエを見ることができるといふ⁴⁶⁾。

このような例からも、首都や村に住む一般の人々よりもむしろ、官僚の方がキリバスの「伝統」を強調し、保存しようとしていることがわかる。人々の側はより無自覚的であり、政府よりも客体化の度合いが弱いといえる。確かに、N村における日常の会話でも白人 (*I-Matang*) とキリバス人 (*I-Kiribati* または *kain Kiribati*) を対比

することがしばしばある。しかしその場合、個人の行為や食料、家屋などの差異を引き合いに出したり、ある個人を揶揄する程度に留まっている⁴⁷⁾。

あるとき N 村の若者が、日本のマネアバはどんなものなのかと私に尋ねてきたことがあった。これはすなわち、マネアバがキリバスのみならず、あらゆる社会に遍在すると考えているものと解釈できる。村人は、タラワの政府官僚や政治家のようにマネアバを外国との対比物として、固定化することはない。一方中央政府は「伝統 (*tradition* または *katei*)」の語を駆使して、対外的にも対内的にも情報を発信している。しかしむしろ、離島部の村人から見ればタラワは外部世界であり、外来の制度や援助物資、輸入物などの出発地や経由地と捉えられている。

6-2. マネアバと平等理念の結合

マネアバに関しては幾つかの規範がある。通常、人が集まっているマネアバの前を乗り物で通り過ぎるときには、スピードを落とさねばならない。とくに、ある村の住民が他村のマネアバ前を通るときには、このような行為が適当とされる。N 村マネアバ前を隣村の住民が自転車で通り過ぎる際、わざわざ降りて自転車を押して歩く姿を私はしばしば目撃した。バイクでカウンシラ・マネアバの前を通り過ぎた国会議員が、罰として紅茶とカブキ (*kabuki*; パンやドーナツ) を供出させられたこともある。N 村では一時期、村マネアバ内にイヌが入ってきたら、飼い主が罰金 2 豪ドルを支払うという罰則が設けられたことがあった。実際に飼い主が罰金を支払った話については聞かなかったが、イヌが入って来そうになると、飼い主が石を投げたり大声を出して、イヌを追い払う光景が見られた。その滑稽な慌てぶりが人々の高らかな笑いを誘っていた。また、現実にはしばしば破られるのであるが、マネアバ内での喧嘩も一般に禁じられていた。これらの行為や動物の侵入はマネアバに対して失礼 (*matauni-nga*) なのだという。

違反行為を明文化しているマネアバもある。B 村のカトリック・マネアバには罰金表が掲示されている。書かれている順に記すと、1) マネアバ内での飲酒が 50 豪ドル、2) 物を庇に吊り下げることが 50 豪セント、3) イヌの侵入が 1 豪ドル、4) 金を賭けた遊びが 10 豪ドル、罰金を払うようにそれぞれ規定している。このような例から、マネアバはただ人が集まるだけの場所ではなく、そこにはさまざまな規範が明示されていることが理解できる。罰則は通常、マネアバにおける長老を中心とした合議で決定される。

合議の場では、マネアバ内の罰則のみならず労働配分やポータキの日程などさまざま

まな事柄が話し合われる。その際、頻繁に使用される語が平等理念のポーラオイとその対立概念のポーブアカである。この語のもつ意味は多様であるが、ポーラオイが平等、均等、ポーブアカが不平等、不均衡といった意味で使われることが多い。また、ポーラオイ／ポーブアカには、物の表面が円滑／凸凹、値段が安い／高い、平和／抗争などの意味やニュアンスも付与されている。通常、合議で問題になるのが、労働や報酬の配分、協同労働へのある個人のサボタージュ、少数者や個人の排他的受益、社会集団の資金の使途などがあげられる。論点はいずれも、単純化すればポーラオイやポーブアカに帰着し得る。そしてこれらの事柄は常にポーラオイであることが必要であり、合議に参加する人々が納得するのは、ポーラオイな決定である。マネアバにおけるポータキにおいても、平等理念のポーラオイが繰り返し再生産されている。ポータキのなかで招待客から手渡されるタバコなどの贈品もポーラオイに人々に分配されなければならない。

マネアバにおける合議には突出した個人はいない。カウンシラ・マネアバでは、取りまとめ役の議長 (*tia babaire*) や進行役の司会者がいるだけである。また村マネアバの合議では、このような役割分担さえも明確ではなく、複数の長老が主導しながら、個人が意見を述べ合うのみである。大抵の場合、既婚の若者は合議に参加しても口を閉ざしたままである。主に意見を述べるのは、長老と狭義のロブアカである。なかには、若者と同様にほとんど意見を言わない長老もいれば、40歳代前半なのに活発に意見を述べる者もいる。意見のなかで、長老の発言のみが影響力をもつわけではない。長老の意見であっても、ロブアカから反論が出されることも普通にある。そして、多数決などで短時間に簡単に結論付けることなく、話し合いは延々と続く。

出された意見が議長や村の長老によってまとめられ、合議に参加した人々に容認されると、それが長老の決定として島または村の住民に伝えられる。この決定に対して、人々は少なくとも公には従わざるを得ない。しかしときには、違反者が出ることもある。それが問題化した場合には再び話し合いがもたれ、ときに違反者に対して罰が科せられる。合議に参加した人々が決定に同意したとき、ポーラオイという平等理念が長老の権威と結合し、集団レベルにおける平等理念が社会集団全体に発動することになる。これを簡略化した図式で示すと以下のようになろう。

ポーラオイ（平等理念）＋マネアバ組織（長老の権威）＝集団レベルの平等化の発動

マネアバや長老の権威による社会集団の統制や合議の決定を人々に遵守させる機構を、「集団的メカニズム」の用語に置き換えることが可能である。当然ながら、個人

が集团的メカニズムに常に従うわけではない。しかし、それが人々の社会生活にきわめて強い影響を及ぼすことは確かである。平等理念が社会集団全体に作用するにあたり、集团的メカニズムは重要である。さまざまな問題を通して、在地の平等理念が実現化され、集团的メカニズムが作用する場として、マネアバの合議を位置付けることが可能である。

6-3. マネアバによる社会集団の統合

マネアバはそれに対応する社会集団を構成する人々に対して、いかなる意味を与えるのだろうか。ここではまず、マネアバは単なる集会所ではないことを強調しなければならない。まず、人々はマネアバの形態にこだわる。タラワの漁業訓練校が海洋訓練校から独立して、新たに発足した際、キリバス人職員からマネアバを建てるよう提案があったという。日本人職員は、コストがかからず建設の容易な平屋根の建築物を建てるよう主張したが、キリバス人はマネアバの形態は平屋根ではなく、入母屋の屋根でなければならないとして譲らなかつたという⁴⁸⁾。

マネアバは、成員が明確な社会集団（学校、村、島、教会）には必ずといってよいほど付随している。ときには、B村の教会信徒のように下部グループ（*kurubi* または *makoro*）がマネアバを建てることもある。マネアバの存在は、さまざまな社会集団を目に見える形で体現しているといえよう。ヨーロッパ由来の諸制度が島にやって来た際、多様なマネアバを建てることによって在地側が反応したと捉えることが可能である。ところで、キリバス語で社会に相当する語は、アオマタ（*aomata*）もしくはポータ・ン・アオマタ（*bota n aomata*）であり、字義通りにはそれぞれ「人」、「人の集まり」と訳すことができる。そして、人の集まりにはマネアバが必要である。社会が多様化すれば、それに伴って多様なマネアバが建設されるのである。そしてあるマネアバが存在することは、他のマネアバと明確に線を引くことを必然的に伴う。言い換えれば、マネアバは社会集団を分画し、成員以外の他者を排除するのである。このようなマネアバが、個人の社会集団への帰属を否応なしに意識させることが容易に理解できる。

現在の村人は、何らかの形で複数の社会集団に帰属している。ある1個人に焦点を当てると、例えばンキアーは、N村成員であり、N村カトリックの信徒であり、カトリック女性団体成員でもある。村マネアバでカウンシラからの報告会があれば、村人として出席するであろう。これらの集団に関わる労働やポータキには参加しなければならない。カトリック・マネアバ新築時には、南グループの一員として働いた。夫

のテカエワウアは学校の委員であるから、学校マネアバで開催されるポータキや合議にも同伴して参加する。さらにタビテウエア・サウスの島民として、独立記念日のポータキには夫とともにカウンシラ・マネアバへ出かけていこう。彼女はパンダナスマットを編むのが得意であるから、カトリック女性団体のポータキ前には、競売用の細編みマットを編むよう要請されるであろう。ポータキや合議などの公的な集会のみならず、労働を行う際にも使用するマネアバは使い分けられる。競売用のマットを編むために女性が集まる場合には、カトリック・マネアバを使うだろうし、村の客への贈品であれば村マネアバを作業場とするに違いない。

個人が社会集団に帰属するならば、対応するマネアバの集會に参加することになる。それは同時に、社会集団の義務がその個人に課せられることをも意味する。社会集団とマネアバへの無私の奉仕として、集団主催のポータキの準備、そしてマネアバの建設や修理への貢献が必須となる。前章でも見たように、マネアバの建設には多大の労働投下が必要となる。カトリック・マネアバ新築労働を観察していて、私は人々の熱意に驚かされた。強制的な労働というよりも、社会集団のシンボルとしてのマネアバ建設を楽しんでいるかのような印象さえ受けた。マネアバに関わる労働は、その集団に帰属する個人々人を統合させるのであり、完成後のマネアバは社会集団統合のシンボルとなる。マネアバがあってこそ、特定の社会集団に所属する人々が共同活動を行うことが可能となるといえよう。翻って考えるならば、マネアバがもつ社会集団の統合力に依拠することにより、教会上部組織が一般の信徒を組織化するのに利用し得るのであり、政府関係者が意図的に繰り返してマネアバに言及するのである。

6-4. 「変換装置」としてのマネアバ

ここで村や島と外部（タラワ、外国）との関わりを考えてみる。より広い現代的な視野からマネアバを見てみると、キリスト教化や植民地支配を経た現在という一時点において、カテイ・ニ・キリバスとして多様なマネアバが存在している。歴史的に新たな集団組織を伴う制度がタビテウエア・サウスに定着すれば、その度に新たなマネアバが作られたといえる。新制度に関わるネットワークの中心に、マネアバは位置するのである。

カウンシラ・マネアバや学校マネアバは明らかに、現在の中央政府から来た法や制度に対応している。さらには、村マネアバも行政末端の村における中央からの情報伝達の一端を担っている。カウンシラ・マネアバを例にすれば、キリバス独立記念式典後にポータキという形で祝賀が行われることから、中央政府の離島統治に利用され

ていることが明らかであろう。また、教会マネアバはキリスト教会上部組織に認められたものであり、村人の教会関連活動や場合によっては献金集めに利用されている。仮に教会上部組織がマネアバの使用を禁じれば、教会マネアバは存続し得ない可能性がある。つまりマネアバは、政府にせよ教会にせよ、外部からの支配と矛盾しないか、または支配に利用し得るといった条件が与えられてこそ、存立し得ると理解できる。

しかしその反面、マネアバの実際の運営は、カウンシラ・マネアバや学校マネアバであろうとも、在地の人々の手中にあることを強調してきた。この点については第1章において論じた FFAB 経済の B、すなわち官僚機構のタビテウエア・サウスにおける浸透に関わる問題である。中央政府から派遣されたクラークや選挙で選ばれたカウンシラは、国家の制度のなかに位置付けられる。ただし、彼らは中央政府と島、島行政府と村の間で情報を長老や村人に伝達し、またときに彼らを説得する役割を果たすのみである。マネアバの合議においては、長老を中心とする人々が決定権を握っている。また、教会マネアバに関する自主的な共同活動については、建設作業の項で充分例証できただろう。

島の公務員や教員は、他島出身者が多い。仮にタビテウエア・サウス出身者であっても、外来者 (*irua*) と同様の位置におかれる。彼らが住むのは主に公務員住宅であり、村人の住む集落とは別の場所である。彼らと村人が顔を合わせ、政府の新政策などに関して合議したり、ポータキを行う場所がマネアバである。つまり、マネアバとはタラワの制度や外来者と在地の制度や人々が接触する交叉空間である。仮に新しく教員が島に着任してきたとする。まずカウンシラ・マネアバに招かれ、島の長老たちによるポータキが行われる。そこでは、出身地や名前が尋ねられ、在地の人々への顔見せが行われる。次いで、学校マネアバで委員や教員と対面する (*bo mata*) 歓迎ポータキが行われる。この過程で、外来者の属性は住民によって認知され、島や村のなかで固有名詞をもつ外来者として位置付けられる。そして頻繁に開催されるポータキなどの場において、外来者としての適切な行為が期待されるようになる。また、タラワを経由して来る外国からの援助なども、まずカウンシラ・マネアバで受け入れられる。そしてすでに見たように、平等的理念であるポーラオイに従って、長老やロロブアカの合議によって仕事が均等に分配されていく。

カウンシラ・マネアバは中央政府の官僚機構が島の人々と接触する場であり、同時に中央政府の政策が遮断され、在地の論理に変換される場である。村マネアバはさらに一段下がった行政の末端として機能する。つまり、マネアバやそこでの合議は外部の制度の一部を構成しているものの、在地の論理や制度のなかで動いている。外来の

制度や来訪者はまずマネアバにおいて、在地の多数の人々に晒され、長老中心の合議やポータキの場で在地の論理に再編または変形され、解釈し直された後に取り込まれていく。言い換えれば、マネアバは外部の論理を一時遮断し、在地の論理に変換する装置と位置付けることができる。

おわりに

本論文では、タビテウエア・サウスにおける実地調査に基づき、多様化したマネアバの現状について、社会・政治的側面を記述し、首都を経由する外部世界との関係を視野に入れて考察した。最後にそれをまとめて稿を終える。

1) 植民地統治下において、グリンブルやモードが再構成した「伝統的」マネアバのモデルと現在の村マネアバの間には、顕著な相異があることを明らかにした。村人たちは、村マネアバに関する神話や、イナキの名称および職能に関する知識をほとんど継承していない。村マネアバでは、村に関わる合議やポータキが長老中心に開催されるほか、それは中央政府につながる島行政府の最末端機関となっている。

2) キリスト教会、島行政府、学校にはそれぞれ「新しい」マネアバが付随している。歴史的に、新たな集団組織を伴う制度がタビテウエア・サウスに定着したことに對して、各マネアバが作られ多様化したと解釈できる。これらのマネアバが、当該制度に関わる人々のネットワークの中心となり、関係する社会集団を統合している。つまりタビテウエア・サウスでは、歴史的に外部世界との相互作用を重ねていくなかで、個人や世帯が分断されるのではなく、むしろ共同体的な枠組みを新たに編成して、対応してきたのである。

3) タビテウエア・サウスは首都から遠隔の地にあるが、外部世界から閉ざされているわけではない。しばしば欠乏しながらも、人々は生活必需品を輸入物資に依存している。また、首都というチャンネルを通して、中央の政策や役人などの外来者が島や村に到達する。各種のマネアバは社会集団の内外を分かち結節点として、外部の諸制度に對峙する。そこで開催されるポータキや合議は、政府から派遣された公務員や教員ではなく、タビテウエア・サウスの長老が主導して進行する。つまり、キリバスの FFAB 経済の B（官僚制）が島では十分に機能し難い状況にある。

4) 各種のマネアバには来島した外来者が招かれ、素性を明らかにされた上で在地社会に認知され、取り込まれる。さらに首都からもたらされた政策や賃労働は、カウンシラ・マネアバや村マネアバにおける合議の過程で、在地理念のポーラオイを付加

される。すなわち、政府や外国の論理は遮断され、在地の人々が納得する論理に変換された後、取り込まれる。いわば、外部の論理を随時遮断、変換することによって、在地の主体性⁴⁹⁾を保持させるのが、タビテウエア・サウスのマネアバなのである。

一方、本論では詳しく検討しなかった経済的側面に焦点を当てると、交通・流通機構という別のルートを通じて、首都とタビテウエア・サウスはつながっている。その機構は貨幣経済の論理に任されており、マネアバや在地の論理によって制御することはできない。人々が現金収入を得る手段は限られ、また交通・流通基盤が未整備なため、慢性的な物資の欠乏に苦しめられている。つまり、タビテウエア・サウスの人々は、現金の獲得や物資の入手に関する限り、外部システムに翻弄され続けている。

タビテウエア・サウスと首都との経済的な接続は、視野を拡大してみるならば、世界大の政治・経済システムと結びついている。経済的側面に関して、外部システムとタビテウエア・サウスのマネアバにより制御される社会集団とのつながりを考察するには、オセアニア島嶼国の MIRAB 経済およびキリバスの FFAB 経済に焦点を当てる必要がある。外部の巨視的システムとタビテウエア・サウスを経済的側面から架橋する論の展開については、別稿にて示した(風間 1999c)。ここでさらに、貨幣経済が浸透した社会内部の微細な側面にも着目すべきであろう。タビテウエア・サウスにおける具体的な人々の行動選択や、さまざまな状況において生じる矛盾や軋轢については、別の機会に検討を譲りたい。

謝 辞

本稿は、総合研究大学院大学に提出した学位論文の一部に修正を加えたものである。学位論文執筆にあたっては、主指導教官の清水昭俊先生、副指導教官の石森秀三先生はじめ、総合研究大学院大学の諸先生方、論文審査委員の先生方に多くの御助言、御指導を戴いた。さらに、匿名の本誌査読者からは、有益なコメントを戴いた。また、本稿に関わる実地調査は、大和銀行アジア・オセアニア財団の研究助成(平成5年度、6年度)により可能になった。調査中、タビテウエア・サウス N 村の長老をはじめとするすべての方々、文化センターのタマエテラ・テアオタイ氏、ブウェレ・エリタイア氏、阿部稔氏をはじめとする当時の在タラワ OFCF 職員の方々に大変お世話になった。ここに記して深く感謝したい。

注

- 1) キリバス共和国はギルバート、フェニックス、ラインの3諸島からなる小島嶼国家である。ギルバート諸島は1892年に英国保護領、1916年にエリス諸島(現ツヴァル)とともに英国植

- 民地となり、1979年に独立した。現在、人口の94%が主要諸島のギルバートに住み、その現地語読みがキリバスである。首都はギルバート諸島中部の南タラワである。
- 2) 私は、キリバスの1994年から1996年にかけて妻とともに20ヶ月間滞在した。うち、ギルバート南部のタビテウエア・サウスに延べ13ヶ月間、主にN村に住み込んで調査を行った。なお、本論ではN村の人々の希望により、実名を用いる。
 - 3) ただし、N村とB村は比較的面積の広いひとつのアイレット上にある。残りの4村はそれぞれ別個のアイレットにある。南端の1村を除いて、5村の所在するアイレットは土堤道路 (causeway) で結ばれている。
 - 4) 異なる宗派の者どうしが結婚した場合、通常女性が男性に合わせる。つまり、ひとつの世帯は原則的にひとつの宗派と見なされる。理由をきくと、夫婦が別々の宗派だと教会の活動時に不便だからという。女性が里帰りしたときには、元の宗派の教会で礼拝する。教会が違ってもキリストは同じだから構わないという。
 - 5) 年齢による区分は男性の場合、上からウニマーネ、ロロボアカ (*rorobuaka*; 既婚男性。「戦士」の意)、ロロンガ (*roronnga*; 未婚の若者)、アタエイ (*ataei*; 子ども) に分けられる。既婚男性はマーネヌーマ (*mwane n uma*; 「家の男」の意) とよばれ、広義のロロボアカと同義である (注30参照)。私はしばしば「50歳になるとウニマーネである」との説明を受けた。しかし実際には、ウニマーネになるための通過儀礼もなく、ロロボアカとウニマーネの境界は曖昧である。50歳前後の同一男性が、状況によってロロボアカといわれたり、ウニマーネといわれたりする。またロロンガはアタエイ・ニ・マーネ (*ataei ni mwane*; 「男の子ども」) と同義であるとの説明を受けた。だが、20~30歳代の男性が既婚未婚を問わず、集合的にアタエイ・ニ・マーネとよばれることがあった。女性の場合、上からウナイネ (*unaine*)、アイヌヌーマ (*aine n uma*; 既婚女性。「家の女」の意)、アタエイ・ン・アイネ (*ataei n aine*; 初潮後の未婚女性、処女。「女の子ども」)、アタエイ (*ataei*; 子ども) に分けられる。成人女性一般はアイネ (*aine*) とよばれる。また、離婚した女性、夫と死別した女性など、夫のいない非処女をニキランロロ (*nikiranroro*) とよぶ。
 - 6) RERF (Revenue Equalization Reserve Fund) とは、植民地期、バナバ島 (現キリバス領) における燐鉱石採掘で得た利益などを積み立てた基金である (佐藤 1993)。なお、バナバの燐鉱石は1979年の独立時に枯渇した。
 - 7) ランズガードによると、1960年代初頭に調査を行ったタビテウエア・サウスのB村マネアバは、屋根の大きさが16×33 m、高さ9 m、屋根の総面積936 m²、床面積528 m²あり、屋根には合計4,812枚のパンダナス葺材を使用していたという (Lundsgaarde 1978: 70)。
 - 8) タビテウエアでは、この座席をボスとよばずイナキ (*inaki*) という。字義通りの意味は葺き屋根の区画である。座席は基本的に父系的に継承されるが、子供が母親の座席を選択することも可能だった。婚姻後の女性は、夫の座席後方に座った (Grimble 1989: 210-212)。
 - 9) カーインガの人口が増えて過密になると、新たに開いた土地に住む人々も出てきた。この土地をカーワ (*kawa*) といった。カーワには独自のボスはなく、成員が集会に参加する際、分出前のカーインガのボスに座ることが許された (Maude 1977 [1963]: 19, 29)。なお現在のカーワとは、行政村やその一部を構成する小集落を表し、元来の意味とは異なる。
 - 10) 私はラトージュの主要なインフォーマントの息子 (30歳代前半) に会った。彼は、亡父から譲り受けた大判のノートを所有していた。そこには数多くの神話やボスの由来が書かれていた。しかし、その解釈は息子でさえもきわめて困難だった。
 - 11) 村マネアバは教会マネアバとは異なり、ボスイナキが多少なりとも意識され、人々も古くからあるマネアバと認識している。グリンブルやモードのいうマネアバは、現在の村マネアバに相当する。ところが、ニクナウ島の6村のうち2村は、村マネアバが放棄されていた。ひとつは村住民間の抗争により破壊され、もうひとつは村全体がキリスト教の一宗派なので、教会のマネアバだけで充分なのだという説明を私は受けた。
 - 12) ランズガードは、ヨーロッパ接触以前に島全体のマネアバがあり、南部キリバスにおける最高の法的権威だったという (Lundsgaarde 1970: 248)。またゲッデスは、島マネアバという用語を使っていないが、島全体の合議があったと述べている (Geddes 1983: 30)。私がタビテウエア・サウスとニクナウで聞いた限り、ランズガードのいう島マネアバがかつて存在したことを確認するには至らなかった。ニクナウ島では、マウンガタブという名の村マネアバで、昔、全島規模の集会所が開かれていたという。これは固有の建築物の島マネアバが存在するのでなく、ある村マネアバを島全体の集会所に利用したことを示すと解釈でき、ゲッデス

- の記述とも矛盾しない。現在、後述のカウンシラ・マネアバが島（行政区）全体の集会に使用される。
- 13) ボータキについては別稿で詳細に論じている（風間 1999b）。
 - 14) イナキは主に父から息子へ継承されるが、ヨアキムが結婚する前の時点で村内には、カラエシウ以外、彼女の亡父のイナキ継承者として適切な男性がいなかった。
 - 15) 実際にはテカエワウアの兄が頻繁に住居に出入りしているが、彼は未婚であった。そのためイナキの後継者とは見なされていない。
 - 16) N村では、テブアウア1人が古くて穴のあいたペーを所持している。その他の男性はペーや毛髪製のベルトを誰も所持していない。タビテウエア・サウスでは、北端の1村のみでペーや毛髪ベルトが数多く保持されていた。
 - 17) 1994年には30世帯だった。翌年、ルアシウ夫妻がネアウアの世帯から独立して新居を構えたため31世帯になった。
 - 18) キマエレはカーインガとはいわず、カйна (*kaina*) といっていた。カーインガをカйнаという例はルオマラの論文にも見ることができる (Luomala 1965: 34)。これはタビテウエア特有の表現かもしれない。また、カйнаは通常パンダナスの木を意味する語である。現在、村人がカーインガという場合、単に人が住む場所の地名といった程度の意味である。
 - 19) モードによれば、ボスの名と付随するカーインガ名は、ほとんど一致するという (Maude 1977 [1963]: 30)。それに沿って考えれば、地名とイナキ名が一致しても矛盾はない。
 - 20) ターワエアとは通常、N村南部の土地の総称である。キマエレらの話によれば、N村は昔、3つの集落（カーワ）に分かれていた。そのひとつが1950年代に独自の行政単位となったK村である。K村分離後のN村はターワエアとNという南北2つの集落から成る。また、村南部の総称でなく一筆の土地にもターワエアという名称がある。イナキとの関係が深いのは、この一筆の土地であり、かつてのカーインガだったと推測できる。
 - 21) 前述のように、タカレブのイナキであるカロンゴアは村マネアバの「第一のイナキ」である。モードやグリーンブルの民族誌では、「第一のイナキ」をカロンゴア・ン・ウエア (*Karongoa n Uea*) といっており、一部符合する。なおウエアとは首長の意である。テアウオキのイナキ名、カロンゴア・ラエレケも彼らの記述に登場する。
 - 22) 既述のブリブリ・テ・ララーに似ているが、ネアウアの主張した名は少し異なる。
 - 23) 首都タラワにおいて離島出身者に話をきいたところ、ボスについて詳しく知る者は、私の知る限り皆無だった。
 - 24) よそ者や招待客イルワーが座らされるのはマネアバの相対的な方角の西側、すなわちラグリーン側座席列の中央付近である。来客が西側の席に座るとき、西側にイナキをもつ者は客に席を譲り、順次詰めていく。ただし外来者が村の客でなく世帯の客であり、世帯成員の友人 (*rao*) または仲間 (*koraki*) としてボータキに参加したならば、その世帯主の隣に座ることもある。
 - 25) この場合、カーインガとイナキの成員は一致すると考え得る。ただし、カーインガに余裕がなくなり、居住者が別の土地に分出して新たにカーワを作った場合、イナキ成員はカーインガとカーワの居住者を含むことになる（注9参照）。
 - 26) ランズガードはタビテウエアを含むキリバス南部を広く調査した。
 - 27) 後述の19世紀にタビテウエアで起こった宗教戦争以前、K村には独自の村マネアバがあったと主張する人もいる。戦争の結果、多くの人が死んでマネアバがなくなったという。それが事実であるにせよ、行政村の成立時に村マネアバが復興したことになり、現在の行政単位である村の成立とマネアバ建設の関係が強固であることに変わりはない。
 - 28) 行政区が分離した年を文書で確認することはできなかった。N村の40歳代女性トゥエは1970年と主張していた。人口統計を見ると、第二次大戦後にタビテウエア・サウスとノースの人口を分けるようになった。したがって、1940年代後半には少なくとも行政区を分離する動きがあったと考えられる。
 - 29) 現在でも、飛行機や船便はタビテウエア・ノースの方が多い。私が短時間見た限りでも、ノースの方が商店、自動車、モーター・バイク、トタンとコンクリート・ブロックの家屋が多くあり、経済的に格差があるという印象を受けた。
 - 30) マネアバの集会における発言では、年齢を問わずすべての参加既婚男性がロロブアカの語で呼びかけられていた。しかし通常、ロロブアカという場合、長老より若年の全既婚男性ではなく、ほぼ40歳代半ば以上の者のみを指していた。本論ではそれを「狭義のロロブアカ」

- と記す。キマエレによれば、ロロブアカの同義語にボウワ・ニ・カーワ (*boua ni kawa*; 「村の柱」の意) がある。
- 31) この話は、当時カウンスラ長だった N 村のナカエウエキアから聞いた。
 - 32) 学校マネアバに関わる具体的事例には、タラワから教育実習生が初等学校に来たときの村側の対応があげられる（風間 1999b）。
 - 33) 首都にはカトリック女性団体経営の店舗があり、離島から集められたこれらの手芸品を販売している。売り上げは教会の資金になる。
 - 34) シオバとはエホバが訛った語という。この信仰は太平洋の土着信仰とキリスト教の融合したものであり、19世紀後半、出稼ぎ帰還者によってタビテウエアに伝えられた。ブッシュの灌木シマハビロ（民俗名ウリウリ; *Guetarda speciosa*）の十字架に鳥の羽毛を付けたシンボルを崇拜したという。当初、タビテウエア北部に広まったがプロテスタント勢力に追いやられて、北部では消滅した。一方、南部はシオバ信者の本拠地となった。1888年、北部のプロテスタント勢力が南部のシオバ信者を急襲し、大虐殺を行った（Maude and Maude 1981; Geddes 1983）。
 - 35) しかし、このなかで通常、長老と見なされているのはアントニオのみであり、テパレレイ、カーモキ、タカレブ、テカエウアはロロブアカと見なされることが多い（注5および注30参照）。またテイオーキは長老としてではなく、説教師として参加していた。テカイワは、40歳を越えているが未婚であり、村の社会的活動には滅多に参加せず、ロロブアカとよばれることもない。
 - 36) マトゥ・ラオイは、スポーツ、踊り、労働の前夜に常に必要とされる。けが人が出ると、マトゥ・ラオイを破り、マトゥ・タラタラ (*matu taratara*; タラタラは見る、起きているの意) だったため、けがをしたのだと理由付けされる。この慣行は、今世紀前半に施行された21時以降の夜間外出禁止令と関係するかも知れない。
 - 37) 魚食の禁止は、ポータキ時の踊り手にも課せられる。魚を食べるとだるくなり、力が入らなくなるという。魚のみならず、コンビーフを食べてはいけないと言う人もいた。実際には、食物禁忌を守らない人も多いようである。
 - 38) 石柱の材料となった拳大の石3個から、重量密度をだまかに算出すると、 2.75 g/cm^3 となった。石柱が、長さ2m、幅80cm、厚さ20cmであり、かつ表面に凸凹のない直方体と仮定すると、1,100kgの重量と計算できる。
 - 39) この金額は1組のプキ・ニ・バイあたり30豪ドルという計算になる。
 - 40) 当時カヌー模型で遊ぶことが男性の間で流行していた。模型の胴体部分はトタンで作るため、トタンの需要が増していた。
 - 41) 古くからのカテイを強調する際にはカテイ・ニ・イカワイ（イカワイ *ikawai* とは「古い」の意）ということもある。
 - 42) 他の長老たち（例えばキマエレやテアウオキなど）は、マネアバはキリスト教や植民地政府が来る前からあったと語る。歴史的にも彼らの解釈の方が正しいだろう。しかし、タータの解釈は、人々のマネアバ観の一例を示すものとして興味深い。また、歴史的事実と一致しないことを理由に、タータの説明を排除する必要はないと私は考える。
 - 43) モードがグリンブルの調査ノートを編集した著作“Tungaru Traditions”（Grimble 1989）の書名にあるトゥンガルが、ギルバート諸島の旧来の呼び名といわれている。しかし、通常の会話やポータキにおいて、キリバスに代えてトゥンガルが使用される例を、私はほとんど聞いたことがなかった。
 - 44) ただし、人々は「一番最初 (*moa*)」であることには高い評価を与える。
 - 45) 文化センター長のタマエテラ氏、元文化センター長のプウェレ氏からそれぞれ聞いた。
 - 46) 村においては、キリバスの踊りを踊れないことは恥ずべきことであり、踊りの高い技術ラバカウ (*rabakau*) をもつ人は敬意を表されていた。私たち夫婦も村に住み始めた当初、踊りを習うよう村人に強制された。タラワでは、人生儀礼のポータキを個人の住居で開催する際、女性がタムレを踊ることがあった。タビテウエアではタムレを見ることはなかったが、ディスコダンス様の踊りか、しばしばポータキ時の余興として踊られていた。
 - 47) 例えば、回しのみしなければならないタバコをいつまでも隣りに渡さない人に対して、「白人のようだ」などという。
 - 48) タラワの漁業訓練校の教員であった阿部稔氏（当時 OFCF 所属）から聞いた。
 - 49) ここでいう「主体」とは、固定化された実体ではなくむしろ、長老の主導によって作動す

る在地社会のネットワークと捉えたい。なお、外部システムに対して在地社会が主体性を温存する機序については、別稿（風間 1999c）において考察した。

文 献

アレン, M. R.

1978 『メラネシアの秘儀とイニシエーション』中山和芳訳, 東京: 弘文堂。

青柳真智子

1982 「Bitang ma Bitang (二つの半分), Eual Saus (四つの角)」および機構的混乱——パラオ政治・社会構造の一考察』ミクロネシア研究委員会編『ミクロネシアの文化人類学的研究——西カロリンの言語・社会・先史文化』pp. 207-274, 東京: 国書刊行会。

Bertram, G. & R. F. Watters

1985 The MIRAB economy in South Pacific microstates. *Pacific viewpoint* 26, 497-519.

1986 The MIRAB process: earlier analysis in context. *Pacific viewpoint* 27, 47-59.

Geddes, W. H.

1977 Social individualisation on Tabiteuea atoll. *Journal of the Polynesian society* 86, 371-392.

1983 *Tabiteuea North. Atoll economy: social change in Kiribati and Tuvalu*, no. 2. Canberra: Australian National University.

Grimble, A. F.

1989 *Tungaru traditions. Writings on the atoll culture of the Gilbert Islands*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Hockings, J.

1989 *Traditional architecture in the Gilbert Islands. Cultural perspective*. St. Lucia: University of Queensland Press.

風間計博

1997 「キリバス南部環礁における輸入食料依存の実態——在地食料システムへの創造的摂取」『アジア経済』38(7), 2-33。

1999a 「貧困のうみだす高価な集会所: キリバス——中部太平洋の平等社会」佐藤浩司編『住まいはかたる』pp. 117-134, 京都: 学芸出版社。

1999b 「タビテウエア・サウスにおけるポータキ(饗宴)の氾濫——周辺社会に生起する社会集団の統合と平等理念の再生産」『アジア・アフリカ言語文化研究』57, 241-280。

1999c 「タビテウエア・サウスに生起する窮乏と主体性の併存——人類学における地域経済モデル活用への試論」『民族学研究』63(4), 382-404。

n.d. 「キリバスにおける出稼ぎ形態の変化と村落社会」『アジア経済』(印刷中)。

Latouche, J-P.

1984 *Mythistoire Tungaru: cosmologies et genealogies aux Iles Gilbert*. Paris: Société d'Études Linguistiques et Anthropologiques de France.

Lawrence, R.

1983 *Tamana. Atoll economy: social change in Kiribati and Tuvalu*, no. 4. Canberra: Australian National University.

Lundsgaarde, H. P.

1968 Some transformation in Gilbertese law: 1892-1966. *Journal of Pacific history* 3, 117-130.

1970 Law and politics on Nonouti Island. In T. G. Harding & B. J. Wallace (eds) *Culture of the Pacific*, pp. 242-264. New York: Free Press.

1978 Post-contact changes in Gilbertese maneaba organization. In N. Gunson (ed.) *The changing Pacific: papers in honour of H. E. Maude*, pp. 67-79. Melbourne: Oxford University Press.

Luomala, K.

1965 Humorous narratives about individual residence to food distribution customs in

風間 タビテウエア・サウスにおけるマネアバ（集会所）の多様化

Tabiteuea, Gilbert Islands. *Journal of American folklore* 78, 28-45.

Macdonald, B. E.

1982 *Cinderellas of the empire: towards a history of Kiribati and Tuvalu*. Canberra: Australian National University Press.

松岡静雄

1927 『ミクロネシア民族誌』東京：岡書院。

Maude, H. C. & H. E. Maude

1981 Tioba and Tabiteuean religious wars. *Journal of the Polynesian society* 90, 307-336.

Maude, H. E.

1977(1963) *The evolution of Gilbertese boti*. Suva: University of the South Pacific.

1980(1961) *The Gilbertese maneaba*. Suva and Tarawa: University of the South Pacific.

Nakibae Tabokai

1993 The maneaba system. In H. Van Trease (ed.) *Atoll politics: the Republic of Kiribati*, pp. 23-29. Christchurch: University of Canterbury.

佐藤元彦

1993 「キリバス経済の構造変化と『持続可能性』」『愛知大学国際問題研究所——紀要』98, 57-82。

清水昭俊

1996 「序——植民地的状況と人類学」『思想化される周辺世界——岩波講座 文化人類学 12』pp. 1-29, 東京：岩波書店。

Statistics Office

1997 *Report on the 1995 census of population*, vol. 1. Tarawa: Republic of Kiribati.